

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第39輯

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う

福瀬遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

1989.3

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第39輯

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う

福瀬遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

1989. 3

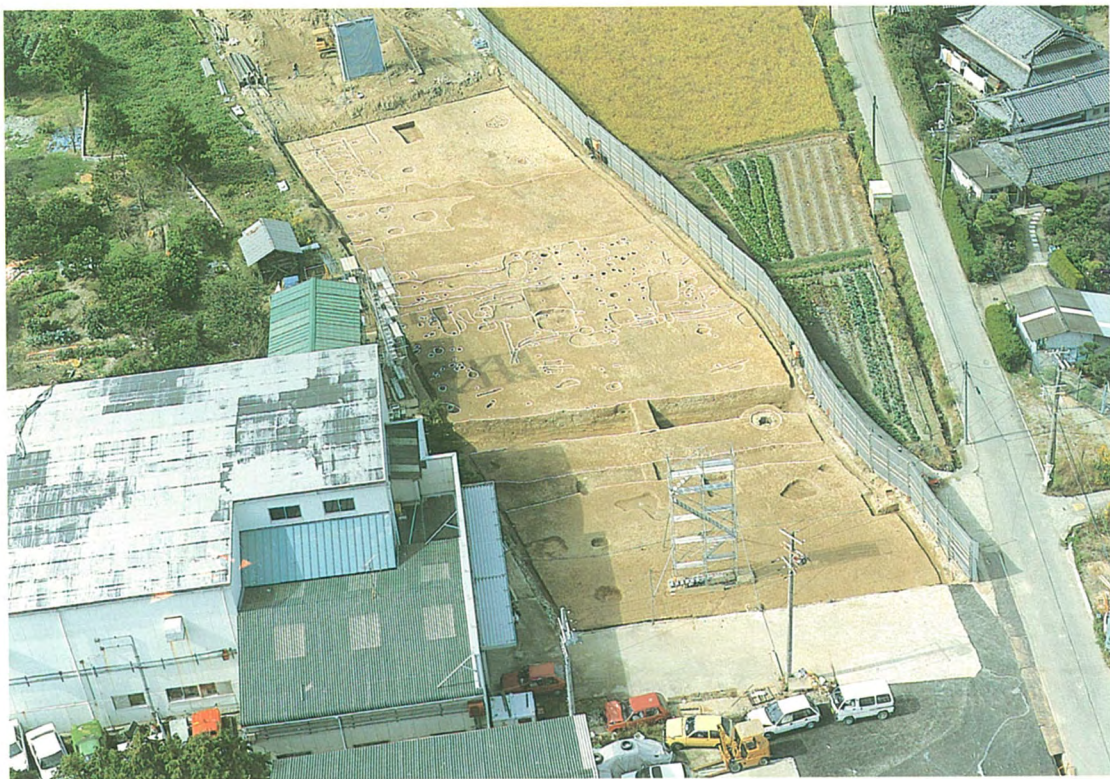
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



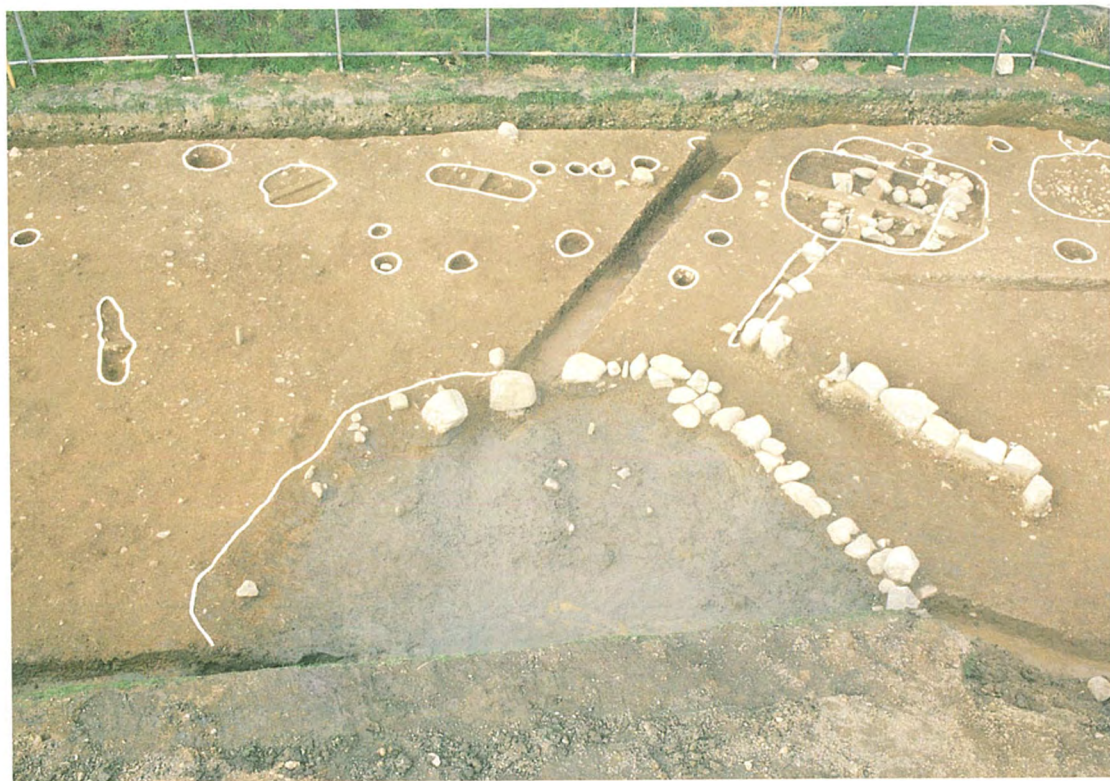
遺跡全景（西から）



遺跡全景（南から）



H地区東半部全景（東から）



522-OY周辺（南から）

序 文

福瀬遺跡のあります和泉市の横山谷は大阪湾から直線距離で約10kmの山間にあります。古代の国名でいえば和泉国と河内国の国境にあたり、古くから南河内と和泉を結ぶ交通路のあったところです。泉州沖に建設中の関西国際空港へのアクセスの一貫として、一般国道170号線（通称大阪外環状線）の建設が計画され、今この山間の各所で国道建設が急ピッチに進められています。

福瀬遺跡の発掘調査はこの建設工事に先だって行ったものです。調査は1987年7月から1988年11月まで3次にわたって実施いたしました。遺跡は西に傾斜するなだらかな扇状地の中にあり、鎌倉時代の溝や建物跡、室町時代終わり頃の屋敷地内の池の跡や竈跡などが見つかっており、当時の生活の場の一端をうかがい知ることができます。まだ一部で未調査の地区がありますが、とりあえずこれまでの成果を一冊にまとめて報告いたします。今回の調査成果が当地域の歴史を解明する一助となれば幸いです。

本調査を実施するにあたって、大阪府教育委員会、大阪府土木部鳳土木事務所、和泉市教育委員会、地元自治会をはじめとする関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝をしております。今後とも当協会の事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成元年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄

例 言

1. 本書は、主要地方道枚方・富田林・泉佐野線（一般国道170号線＝通称大阪外環状線）建設に伴う和泉市福瀬町内に所在する福瀬遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府土木部鳳土木事務所の委託を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は1次調査を昭和62年7月13日～昭和63年1月14日、2次調査を昭和62年11月14日～昭和63年3月25日、3次調査を昭和63年5月7日～昭和63年11月30日まで実施した。各担当者は以下の通りである。

1次調査	技師	岡本敏行・同	趙哲済
2次調査	技師	岡本敏行・同	仁木昭夫
3次調査	技師	岡本敏行・同	仁木昭夫

また、3次調査の後半には技師今村道雄の参加を得るとともに、調査期間中随時主査藤田憲司・森村健一の協力・参加を得た。
4. 調査の実施にあたっては、大阪府土木部鳳土木事務所、和泉市教育委員会及び地元関係各位の協力を得た。
5. 本書の執筆・編集は主として岡本が担当したが、遺物の記載については今村、仁木及び技師渋谷高秀の協力を得た。執筆分担は目次に示す通りである。
7. 出土遺物は一括して、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が保管している。
8. 調査にあたっては、写真・実測図などの記録を作成するとともにカラーズライドを作成した。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 本書における座標は、国土座標（第Ⅵ系）を使用している。従って方位は座標北を示す。
2. 調査においては、当協会が国土座標を基準に独自の地区割りを設定しているが、本書では長大な調査区であることから、混乱を生じる可能性もあり、便宜的にA～Iの地区名で呼称している。具体的には本文中に記す。
3. 標高は東京湾標準潮位（T.P.）で表示している。
4. 本書で用いた遺構記号は、当協会の『発掘調査規程』に基づくものであり、今回使用したものは以下の通りである。

OA：道路	OB：建物	OE：土塁・石塁	OF：柵・塀	OO：土抗
OP：ピット	OS：溝	OW：井戸	OY：園池	OZ：水田
OH：カマド	OI：暗渠	OX：その他・不明		
5. 遺構番号は、調査の段階で付けたものをそのまま使用している。基本的にはA地区100番代、B地区0～99、C地区200番代、D地区300番代、E地区400番代、F地区500番代、G地区600番代、H地区600・700・800・6000番代、I地区800番代を付している。

例：100-O O⇒A地区の遺構	85-O S⇒B地区の遺構	522-O Y⇒F地区
の遺構	6085-O S⇒H地区の遺構	
6. 遺物の縮尺率は基本的に土器1/4・1/5・1/6、瓦1/4・1/6、木製品1/4・1/5、石製品1/2・1/3、金属製品1/2・1/4、その他2/3・1/2である。
7. 遺物には通し番号を付し、本文中の遺物番号は遺物実測図番号及び図版遺物番号に一致する。
8. 本書に用いた土壌色は小川正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖5版』（1976）による。

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
第1章 序 説	(岡本敏行) 1
第1節 調査の経過 1
第2節 調査の方法 3
第2章 立地と環境 6
第1節 自然・地理的環境 6
第2節 歴史的環境 11
第3章 遺 跡 21
第1節 調査地域の微地形 21
第2節 層序 22
第3節 遺跡の概要 26
第4節 A地区 30
第5節 B地区 33
第6節 C地区 42
第7節 D地区 51
第8節 E地区 55
第9節 F地区 60
第10節 G地区 81
第11節 H地区 89
第12節 I地区 105
第4章 遺 物 112
第1節 土器・陶磁器	(渋谷高秀・岡本) 112
第2節 瓦	(今村道雄) 179
第3節 木製品	(今村・岡本) 182
第4節 石製品	(仁木昭夫) 188

第5節	金属製品	(今村)	193
第6節	その他の遺物		197
1.	土製品	(仁木)	197
2.	古銭		197
3.	自然遺物	(岡本)	198
第5章	自然科学分析	(川崎地質株式会社・岡本)	200
第1節	花粉分析		200
第2節	火山灰分析		201
第6章	まとめと若干の考察		207
第1節	遺構の時期区分と変遷	(岡本)	207
第2節	H地区検出館跡の復原		213
第3節	F地区検出522-OYとその周辺		219
第4節	遺跡内における中・近世の開発		220
第5節	遺物の検討	(渋谷・岡本)	223
第6節	総括	(岡本)	228

挿図目次

第1図	和泉市位置図	6
第2図	福瀬遺跡位置図	9
第3図	調査地周辺の地形分類	9
第4図	調査区位置図	10
第5図	周辺の遺跡分布図	12
第6図	仏並遺跡出土土面	13
第7図	調査地周辺微地形	23~24
第8図	地区割及び調査地断面模式図	27~28
第9図	A地区全体図	31
第10図	B地区第1遺構面全体図	33
第11図	01-OI南壁断面	34
第12図	B地区第2遺構面全体図	35

第13図	20-O S 土層断面図	36
第14図	B地区第2遺構面推定水田区画	38
第15図	B地区第3遺構面全体図	39
第16図	44-O O 土層断面図	40
第17図	下層確認調査区	41
第18図	C地区上層遺構面全体図	43~44
第19図	219-O O 北壁土層断面図	45
第20図	C地区推定水田区画	46
第21図	C地区下層遺構面全体図	47~48
第22図	C地区下層遺構面検出土坑群土層断面図	50
第23図	D地区全体図	52
第24図	306・311-O O 実測図	53
第25図	D地区推定水田区画	54
第26図	E地区全体図	56
第27図	E地区推定水田区画	58
第28図	435-O O 実測図	59
第29図	F地区第1・2遺構面全体図	61~62
第30図	525-O B 周辺平面図	63
第31図	525-O B 実測図	64
第32図	526・527・528-O X 実測図	65
第33図	524-O H 実測図	66
第34図	501-O S・515・518-O I 断面図	67
第35図	553・556-O B 周辺実測図	69
第36図	522-O Y 周辺平面図	71
第37図	522-O Y 実測図	72
第38図	552-O X 実測図	73
第39図	552-O Y と563-O X 関係図	74
第40図	502・503-O O 実測図	75
第41図	531-O X 土層断面図	77
第42図	546-O X 実測図	78

第43図	532・550—O P 実測図	79
第44図	529—O Z 実測図	79
第45図	F 地区東部推定水田区画	80
第46図	F 地区東部第3 遺構面全体図	80
第47図	554—O O 土層断面図	81
第48図	G 地区全体図	82
第49図	648・614—O S 土層断面	83
第50図	G 地区推定水田区画	84
第51図	H 地区全体図	85~86
第52図	H 地区東半部建物群周辺実測図	87~88
第53図	6200—O B 実測図	90
第54図	6300—O B 実測図	91
第55図	6028—O W 実測図	92
第56図	6085—O S 南壁土層断面図	94
第57図	6037—O S・6034—O O・6044—O O 関係土層断面図	97
第58図	6027・6051・6054・6082—O O 遺物出土状態図	98
第59図	682・6055・6140—O O 実測図	100
第60図	662・701—O O 実測図	101
第61図	700—O X 実測図	103
第62図	H 地区中央部推定水田区画	104
第63図	I 地区全体図	105
第64図	800—O X (A) 実測図	107
第65図	集石土抗実測図	109
第66図	A・B 地区出土土器 (1)	115
第67図	B 地区出土土器 (2)	116
第68図	B 地区出土土器 (3)	117
第69図	C 地区出土土器 (1)	123
第70図	C・D・E 地区出土土器 (2)	124
第71図	C・D・E 地区出土土器 (3)	125
第72図	F 地区出土土器 (1)	136

第73图	F地区出土土器(2)	137
第74图	F地区出土土器(3)	138
第75图	F地区出土土器(4)	139
第76图	F地区出土土器(5)	140
第77图	F地区出土土器(6)	141
第78图	F地区出土土器(7)	142
第79图	F地区出土土器(8)	143
第80图	F地区出土土器(9)	144
第81图	F地区出土土器(10)	145
第82图	F地区出土土器(11)	146
第83图	F地区出土土器(12)	147
第84图	F地区出土土器(13)	148
第85图	F地区出土土器(14)	149
第86图	F地区出土土器(15)	150
第87图	G·H地区出土土器(1)	161
第88图	H地区出土土器(2)	162
第89图	H地区出土土器(3)	163
第90图	H地区出土土器(4)	164
第91图	H地区出土土器(5)	165
第92图	H地区出土土器(6)	166
第93图	H地区出土土器(7)	167
第94图	H地区出土土器(8)	168
第95图	H地区出土土器(9)	169
第96图	I地区出土土器(1)	173
第97图	I地区出土土器(2)	174
第98图	I地区出土土器(3)	175
第99图	I地区出土土器(4)	176
第100图	I地区出土土器(5)	177
第101图	I地区出土土器(6)	178
第102图	出土軒瓦(1)	179

第103図	出土瓦（2）	180
第104図	出土木製品（1）	184
第105図	出土木製品（2）	185
第106図	出土木製品（3）	186
第107図	出土木製品（4）	187
第108図	出土石器・剥片	190
第109図	出土石核・砥石	191
第110図	出土金属製品（1）	195
第111図	出土金属製品（2）	196
第112図	出土土製品	197
第113図	出土古銭	198
第114図	F地区V～VII期時期別変遷図	209
第115図	H地区IV期時期別変遷図	210
第116図	集落推定位置図	211
第117図	館跡推定位置図	214
第118図	館跡推定復原図	215
第119図	上今居郷屋敷絵図	217
第120図	矢島館址概念図	218
第121図	B地区における水田断面模式図	221
第122図	和泉羽釜編年表と10～11世紀前葉の羽釜	223
第123図	紀伊羽釜編年表	225

写真目次

写真1	B地区調査風景	2
写真2	埋戻し状況	2
写真3	H地区館跡地域の海砂による保護状況	3
写真4	花粉化石顕微鏡写真（1）	204
写真5	花粉化石顕微鏡写真（2）	205
写真6	火山ガラス含有状況顕微鏡写真	206

表 目 次

第1表 石製品計測一覧表	192
第2表 主要遺構時期別一覧表	212

卷頭図版目次

卷頭図版1 遺跡全景・遺跡全景
卷頭図版2 H地区東半部全景・522-OY周辺

図版目次

図版1 遺跡 遺跡周辺垂直写真
図版2 遺跡 調査地全景
図版3 遺跡 A地区 上層遺構面全景・下層遺構面全景
図版4 遺跡 B地区 第1遺構面東半部全景・第1遺構面西半部全景
図版5 遺跡 B地区 02・06-O S・01-O I・04-O I北半部・04-O I
図版6 遺跡 B地区 第2遺構面全景・同左中央部分細部
図版7 遺跡 B地区 第3遺構面全景・同左
図版8 遺跡 B地区 下層確認トレンチ及び第2～第10層土層断面・下層確認調査区第10層上面検出遺構(50-O O)
図版9 遺跡 C地区・D地区東半部 上層遺構面全景・同左
図版10 遺跡 C・D地区 219-O O土層断面・311-O O
図版11 遺跡 C地区 下層遺構面全景・同左
図版12 遺跡 D地区西半部・E地区 全景・424・425-O S
図版13 遺跡 E地区 東半部下層遺構面全景・435-O O遺物出土状態
図版14 遺跡 F地区 西半部第1遺構面全景・第1遺構面525-O B周辺全景
図版15 遺跡 F地区 525-O B・524-O H
図版16 遺跡 F地区 501-O S・518-O I・517-O I・515-O I

- 図版17 遺跡 F地区 東半部全景・中・西半部全景
 図版18 遺跡 F地区 522-O Y周辺・同左
 図版19 遺跡 F地区 522-O Y土層断面・552-O X
 図版20 遺跡 F地区 531-O Xと建物群周辺・529・530-O Z
 図版21 遺跡 F地区 546-O O・531-O X南壁土層断面
 図版22 遺跡 F地区 1. 532-O P 2. 550-O P
 3. 526-O X 4. 金属製品出土状態
 東半部第3遺構面全景
 図版23 遺跡 G地区 全景・同左
 図版24 遺跡 H地区 東半部全景（垂直）・同左
 図版25 遺跡 H地区 東半部全景・同左
 図版26 遺跡 H地区 館跡周辺部垂直写真
 図版27 遺跡 H地区 6085・6086-O S・東半部中央付近
 図版28 遺跡 H地区 6085-O S・6085-O S南壁土層断面
 図版29 遺跡 H地区 6200-O B・6300-O B
 図版30 遺跡 H地区 6028-O W・662-O O
 図版31 遺跡 H地区 6027-O O遺物出土状態・6054-O O遺物出土状態
 図版32 遺跡 H地区 6051-O O遺物出土状態・6094-O P・6162-O P
 図版33 遺跡 H地区西半部・I地区 全景・同左
 図版34 遺跡 H地区 西部検出土坑群・701-O O
 図版35 遺跡 H地区 700-O X・同左土層断面
 図版36 遺跡 I地区 800-O X（A）・867-O X
 図版37 遺跡 I地区 861-O X・863-O X
 図版38 遺跡 I地区 800-O X（A）完掘状態・861-O X完掘状態
 図版39 遺物 土器（1）
 図版40 遺物 土器（2）
 図版41 遺物 土器（3） 瓦器碗
 図版42 遺物 土器（4） 瓦器碗
 図版43 遺物 土器（5）
 図版44 遺物 土器（6） 瓦器皿・青磁皿

図版45	遺物	土器（7）	土師皿
図版46	遺物	土器（8）	土師皿
図版47	遺物	土器（9）	
図版48	遺物	土器（10）	
図版49	遺物	土器（11）	
図版50	遺物	土器（12）	青磁・青白磁
図版51	遺物	土器（13）	青磁・青磁
図版52	遺物	土器（14）	羽釜（土師質）・羽釜（瓦質）
図版53	遺物	土器（15）	すり鉢・すり鉢
図版54	遺物	土器（16）	甕・甕
図版55	遺物	土器（17）	
図版56	遺物	土器（18）	その他 縄文土器・古銭・土製品・種子
図版57	遺物	瓦	
図版58	遺物	木製品（1）	
図版59	遺物	木製品（2）	
図版60	遺物	木製品（3）	
図版61	遺物	石製品（1）	
図版62	遺物	石製品（2）	
図版63	遺物	金属製品	

付図 調査地全体図

第1章 序 説

第1節 調査の経過

はじめに 福瀬遺跡は、大阪府和泉市福瀬町に位置する。本遺跡は、昭和48年に(財)大阪文化財センターによる主要地方道枚方・富田林・泉佐野線（一般国道170号—通称大阪外環状線）予定地内の分布調査によって発見された遺跡である⁽¹⁾。それによると当初、福瀬東、西の2遺跡に分割されており、東遺跡からは弥生土器・土師器、西遺跡からは奈良時代の須恵器等の散布が認められたとされる。また、昭和52年大阪府教育委員会発行の『大阪府文化財分布図』にも周知の遺跡として登録されている⁽²⁾。

今回調査するにあたって、これまで不明確であった本遺跡が縄文時代から現代までの複合遺跡であることが判明し、多くの遺構・遺物が検出された。特に鎌倉時代から室町時代の遺構・遺物に見るべきものがあり、その中でもF地区検出の園池やH地区検出の館跡等は特筆されるべきものである。

調査経過 外環状線は、河内長野市以北がすでに完成しているが、その後の泉州沖新空港建設と相まって、河内長野市以南の着工も急がれることになった。そのため、昭和61年度に(財)大阪府埋蔵文化財協会によって試掘調査が実施され、福瀬東・西の両遺跡を含めた東西約500mの範囲で遺構・遺物が確認された⁽³⁾。その成果をうけて、大阪府教育委員会と大阪府土木部ならびに本協会との間で協議がかさねられた。その結果、遺構・遺物が検出される全面について本調査を行なうことが決定されるに至った。

調査は、本道路工事が新空港関連事業に含められることから、試掘調査に引き続き、当協会で実施することになり、本工事区間を管轄している大阪府土木部鳳土木事務所との間で委託契約を締結するに至った。調査面積は約12000㎡を測り、昭和62年度、63年度の2ヶ年にまたがり、計3次の調査に分割・実施した。調査期間は以下の通りである。

1次調査 昭和62年7月13日～昭和63年1月14日

2次調査 昭和62年11月14日～昭和63年3月25日

3次調査 昭和63年5月7日～昭和63年11月30日

現地調査終了後、すなわち、昭和63年12月1日より本格的な整理事業を開始し、平成元年3月31日をもってすべての事業を終了した。なお、試掘調査の結果、福瀬東・西の両遺

跡は一連の同一遺跡であることが判明したので今後両遺跡を合せて福瀬遺跡と称したい。

1次調査 A・B・F地区計2900㎡を調査対象とする。現地には昭和62年8月3日より常駐するが、本格的には盆あけの8月18日より調査を開始。まず、B地区より機械掘削を始め、順次A・F地区に移る。ただ調査を開始した時点で、掘削深度が当初考えていたよりもかなり深くなることが判明したので、再度鳳土木事務所との間で予算等の調整を行なう。本次調査区においては、遺構面が2面以上確認されたこと、しかも多くの遺構が検出されたため、調査には面積に比較して長時間を費やすことになった。また、B・F地区では花粉分析及び火山灰分析等も実施した。調査は昭和62年12月15日に終了し、F地区522-OY周辺を海砂により保護したのち、同年12月29日に埋戻しを完了した。

2次調査 C・D・E地区が調査対象地である。総面積は約4100㎡を測り、C地区・D地区東半部とD地区西半部・E地区の2段階に分けて調査を行なう。前者地区を最初に行

ない、排土置場等の関係から調査終了後一度埋戻し、その後後者地区を調査する。現地調査は昭和62年12月7日より開始し、昭和63年3月25日にすべての埋戻し及び器材等の撤収を完了した。開始時期が前記の通り

となったため、一部については1次調査と並行して行なった部分もある。さらに、前回の試掘調査で確認できなかった東槇尾川までの西側約200mの区間についても試掘調査を合せ実施した。試掘調査は、1×1m程度の小規模トレンチを7ヶ所設定し、3次調査の基礎資料とした。なお、試掘調査の結果、東槇尾川右岸の氾濫原と考えられる地域では、遺構、遺物は検出されなかった。

3次調査 本次調査は、2次調査



写真1 B地区調査風景



写真2 埋戻し状況

における試掘調査をもとに、昭和63年度事業としてG・H・I地区までを調査対象地とした。調査面積は約5000㎡である。現地調査は昭和63年6月1日より始め、同年10月25日に終了した。その間地元との調整が難航し、調査が一時中断するという事態も生じた。しかし、その後地元の理解を得て、再開することが可能となり、ここに無事調査終了のはこびとなった。調査は、地元調整及び埋

戻し、排土置場等の関係からI地区とH地区西半部を最初に同時着工し、次にG地区、最後にH地区東半部と3段階に分けて実施した。特に大阪府教育委員会からは、H地区東半部で検出した鎌倉時代の館跡とその周

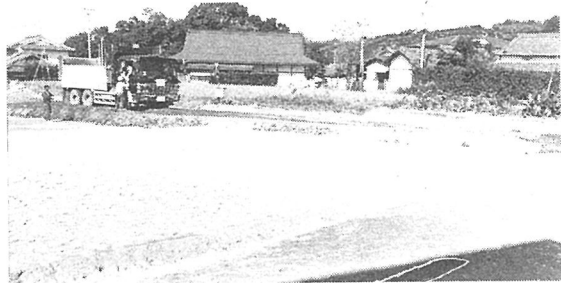


写真3 H地区館跡地域の海砂による保護状況

辺部を海砂で保護した後埋戻しするよう指示を受ける。

整理作業 1～3次調査で出土した遺物はコンテナにして約300箱にのぼる。整理作業は、当協会泉大津調査事務所内で行なう。本格的な整理は、昭和63年12月1日より実施したが、洗浄・注記の一部については調査と並行して行なったものもある。さらに2次調査と3次調査の間では、前記作業に加えて1・2次調査で出土した遺物の分類等も実施した。基本的には昭和63年12月に遺構図面の整理と遺物の洗浄・注記・実測遺物の選別を行なう。その間、報告書作成にあたっての計画書を提出する。平成元年1月からは、遺物実測、遺物復原、遺構図面の作成を主に行なう。2月には遺構・遺物図面・写真図版（遺構）を作成し、遺物撮影を並行して行なう。3月は原稿執筆を中心とし、写真図版（遺物）及び追加図面の作成、補足等を行ない、ここに報告書の刊行に至ったものである。その間、多くの人々に御教示を得たことを記しておきたい。また、木製品については、整理作業の段階で保存処理と樹種鑑定を元興寺文化財研究所に依頼することになったため、今回の報告書には樹種鑑定は割愛している。

第2節 調査の方法

調査方法 今回の調査予定地は、広面積であることから、3次の調査を実施した。さらに各次調査は、重機の運搬・搬入及び排土置場確保等の関係から、細かく分割し、反転を繰返しながらの調査であった。

表土は機械力によって除去し、それ以外は人力掘削を基本とした。また、時間の許すかぎり、各層ごとでの遺構検出を試みるよう努めた。最終面調査終了後には、万全を期すため各地区ごとに断割りを実施し、下層における遺構の有無及び土層の堆積状況を確認した。

実測には、調査期間を少しでも短縮し、しかも正確でなければならないことから航空測量を実施した。しかし、予算等の関係もあり、各調査段階で1回、すなわち、1次調査で2回、2次調査で2回、3次調査で3回の計7回の航空測量しか実施できなかった。したがって、同一調査区内に遺構面が複数存在する場合、航空測量を実施できなかった遺構面については手書きによった。

なお、本協会では安全管理と一定の人員を確保し、円滑に調査を進めるために一般土木業者による請負工事制による発掘調査を導入している。今回の調査もそれによる。

保存措置 遺構の保存については、最終面の調査終了時に府教育委員会の立会を受け、特に重要と判断された遺構については、海砂を被覆することによって保存処置を講じた。今回の調査では、F地区522-OYとその周辺及びH地区検出の鎌倉時代館跡を海砂によって保護し、将来に供せられるようにしている。また、その他の遺構については、道路建設が主に盛土工法であることからそのまま埋戻し、現状保存の形をとった。しかし、遺構面が複数存在する場合については、上層面は調査終了段階で破壊を余儀無くされたことから記録保存のみにならざるを得なかった。

地区割 調査地は、本協会独自の地区割を行なっている。詳細については当協会発行の『発掘調査規程』⁽⁴⁾を参照されたいが、ここでは少しその手順について記しておく。

調査区は、国土座標の第Ⅵ座標系により、4×4mに区画し、それぞれに名称をつけた。区画名のつけ方は、大阪府発行の1/2500地形図（都市計画図）を使用している。福瀬遺跡は「大C-5-14」図に当たる。地図内を12等分して500×500mの方形区画をつくり、北西区画よりA～Lの記号を付す。次に、この500m区画を25等分して、100×100mの方形区画をつくり、同様に北西隅より01～25の数値を付ける。さらに、100m区画を625等分し4m方眼に細分する。この区画を最小単位とし、2文字のアルファベットで表現する（例えば、北西隅の区画はAAとなる）。したがって、今回の調査区はC-5-14-F01～F05・G01区に当り、この中を4m方眼に細分している。

遺構実測及び遺物取上げ等は上記地区割を利用しているが、今回の調査は広範囲であることから地形、道路、水路等によって便宜的に東からA～Iの各地区に分けている（第8図参照）。今回の報告書では、従来の地区割で説明すると混乱を生じる可能性もあり、便

宜的に設定したA～Iの地区名で説明している。

記 録 本報告書の記載方法は凡例に記した通りであり、基本的には当協会の発掘調査規程に合わせている。⁽⁵⁾また、調査にあたっては、写真・実測図を作成すると共に、ビデオ撮影及びカラスライドも多数作成した。広く各方面で利用されることを希望する。

註

- (1) (財)大阪文化財センター『主要地方道枚方・富田林・泉佐野線バイパス（大阪外環状線）予定路線内埋蔵文化財分布調査報告書』昭和48年
- (2) 大阪府教育委員会『大阪府文化財分布図』昭和52年
- (3) (財)大阪府埋蔵文化財協会『福瀬遺跡・仏並遺跡－試掘調査事業報告書－』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査事業報告書第2冊 昭和61年
- (4) (財)大阪府埋蔵文化財協会『発掘調査規程』昭和60年
- (5) 前掲 註(4)に同じ。

第2章 立地と環境

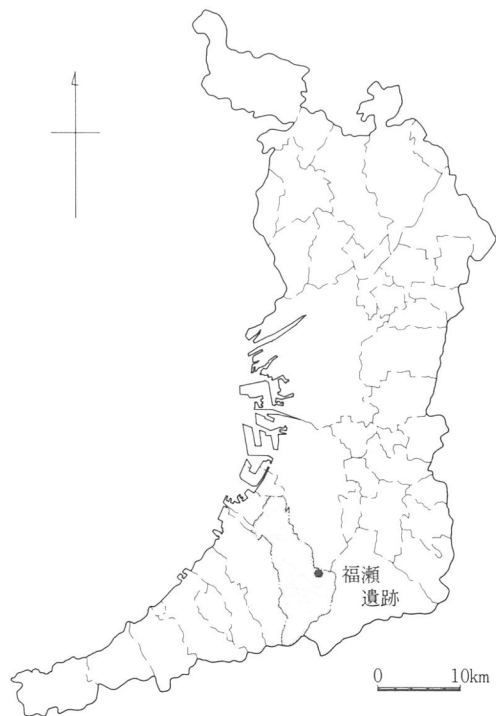
第1節 自然・地理的環境

位 置 福瀬遺跡の所在する和泉市は、大阪府の南部東寄りに位置する。北と東は堺市、南東は河内長野市、南は和泉山脈を隔てて和歌山県と接する。南西は岸和田市、北西は高石市、泉大津市、忠岡町と接している。海岸線をもたず、北西から南東におよぶ細長い市域である⁽¹⁾。

本遺跡は、和泉市の南東に位置する「横山谷」と称される小盆地の東部、東槇尾川の右岸に立地し、福瀬集落のほぼ中央部に当る。福瀬町は、大阪市の中心部より南に直線で約30km、和泉市の中心部府中より約10kmの地点に当るが、どちらかといえば山間部といえるであろう。町内の中央部には、国道170号がほぼ東西に貫通している。

地 形 大阪府南部のいわゆる泉州地域は、一般的に東南部に山地があり、それを流水源として、西方ないし北西方向に展開する台地・丘陵地、さらにそれにつながってひらけていく平地の3地域に大別される。和泉市内で山地を構成するのは、いうまでもなく和泉山脈である。本山脈は大阪府と和歌山県の境を形成し、東側で金剛山地とほぼ直角に交わる。本山脈中の三国山が市内で最も高く886mを測る。

丘陵部は、北西部に信太山丘陵、中央部に和泉丘陵、南東部に横山盆地が形成されている。山間部からこれらの丘陵地を縦断するように、北側に槇尾川、南側に松尾川がそれぞれ大阪湾に向かって北西流し、開析谷をつくりだしている。槇尾川によって開析された谷は池田谷と呼ばれ、谷幅は広く、河岸段丘が発達している。さらに池田谷の



第1図 和泉市位置図

上流には、国分峠を境に通称「横山谷」と呼ばれる小盆地がひらけている。福瀬遺跡が本盆地内に位置することは先に記した通りである。榎尾川は横山盆地で東榎尾川と父鬼川の支流に分かれ、盆地内の複雑な地形を形成している。

松尾川によって開析された谷は松尾谷と呼ばれ、和泉丘陵の中を通り、谷幅も狭い。谷筋には水田が開け、水量がかならずしも豊富でないことから、谷間をせき止めて多数の溜池が構築されているのもこの地域の特色である。谷山池・梨本池・光明池等がその代表的なものであり、谷筋や台地上に広がる水田に農業用水を供給している。また、これらの丘陵地域は、和泉市の伝統的文化遺産を多数包蔵する地帯でもある。しかし、近年の大阪市を中心とする各都市への人口集中によって、これら丘陵地域に大規模な宅地造成や土砂採取が行なわれるなど、自然破壊が最も進んでいる地域でもある。

池田谷と松尾谷に接する北側、榎尾川と松尾川が交流するところから海岸にかけてが平野部にあたり、この地域が古代より現在に至る和泉市の中枢部をなしている。丘陵部と平地部との間には、外観上でもそれと明瞭に区別できる段丘崖が認められる。

地質 次に上記の地形を形成している地質について概観してみよう。泉州地方は地質学的には領家帯に属する。和泉山脈の主部を形成する地質は、礫岩・砂岩・泥岩及びそれらの互層からなり、一般に成層状態が良好とされる。この一連の地層を和泉層群と呼ぶ。特に和泉層群中の砂岩は、中粒～細粒で均質で比較的丈夫であること、色が美しいこと、細工がしやすいことから、古来より和泉石と呼ばれ、多方面で活用されている。和泉層群の時期は発見された化石より中世代白亜紀と考えられている。

丘陵部を形成している地層は大阪層群と呼ばれる。礫・砂・粘土及びその互層である。大阪層群は、新生代の第三紀（鮮新世）末から第四紀（最新世＝洪積世）にかけて形成されたとされる。丘陵地と河川流域の間には河岸段丘の平坦な地形がひろがっている。これら段丘の表面はほとんど水平、あるいは平野に向かってわずかに傾斜する堆積物によって形成されている。この地層は、下位の大阪層群を不整合におおい、構造的にも不協和である。これが段丘層と呼ばれるものである。

泉州地方の段丘は、段丘面の現河床からの高さ、風化の度合などのちがいによって、高位、中位、低位の3つに大別される。これらは河成の礫と砂で構成されている。洪積層の段丘に対して、狭小ながらも沖積層の低地も部分的ではあるが数多く見られる。谷底低地、氾濫原、旧河道、沖積段丘がそれに当り、軟弱な粘土や砂礫から構成されている。

気候 大阪湾と和泉山脈にはさまれた和泉市は気候は温暖であり、降水量は概して

少ない。しかし、平野部から山間部に至る細長い市域をなしていることから、平均気温において山間と平野とでは2°C前後の差違がある。また降水量も山間部においてやや多い。

横山谷 福瀬遺跡の所在する横山谷についていまだ少し詳細に観察してみよう。横山谷は、大別すると西半の父鬼川流域と東半の東楨尾川流域に分かれる。福瀬遺跡が後者に属することはすでに記した。前者の谷は、北々東から南々西の方向にのび、幅0.7~0.8km、長さ約2.5kmを測る。後者の谷は前者と直角に交わり、西北から東南方向にのび、幅0.4km、長さ約2.5kmを測る。また、両者間の北田中町付近から南東方向にのびる幅0.2~0.3km、長さ約1.5kmの谷が形成されている。この谷は最奥部の九鬼町付近において、さらに西方に屈曲し、父鬼川流域の坪井町付近とつながっている。

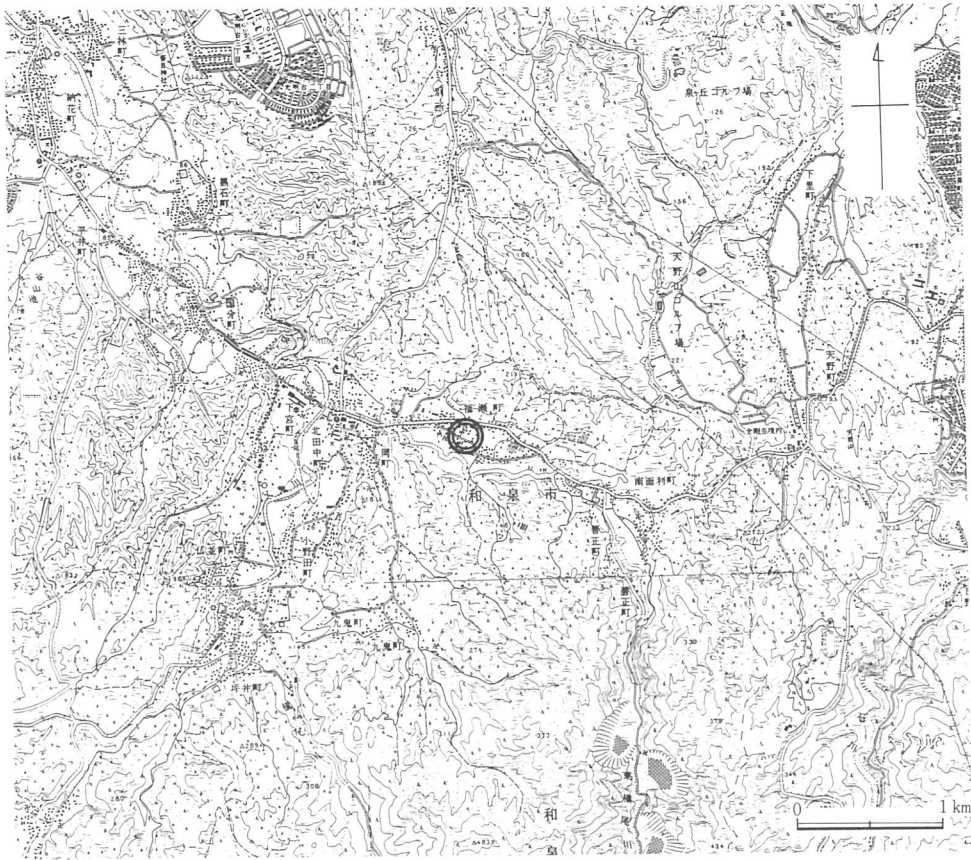
これらの谷にひろがる平坦面はほとんどが段丘であり、沖積面の発達地は少ない。高位段丘面は存在しない。中位段丘上面は山地・丘陵の縁辺にあり、あまり顕著ではない。父鬼川流域では、左岸の下宮町から仏並町付近にかけて比較的広い部分が認められる。東楨尾川流域では谷奥部に部分的に観察されるのみである。中央のせまい谷部は標高も高く、中位段丘上面が多くを占めている。これらは丘陵部と共に果樹園として利用されている場合が多い。

中位段丘下面是平坦地のうち最も広い面積を占める。父鬼川流域では右岸の大部分がそれであり、左岸では主に北半部に分布している。東楨尾川流域でも右岸の大半を占めるが、左岸では流れの関係もあり、ほとんど認められない。集落はもちろん水田及び果樹園に利用されている場合が多い。

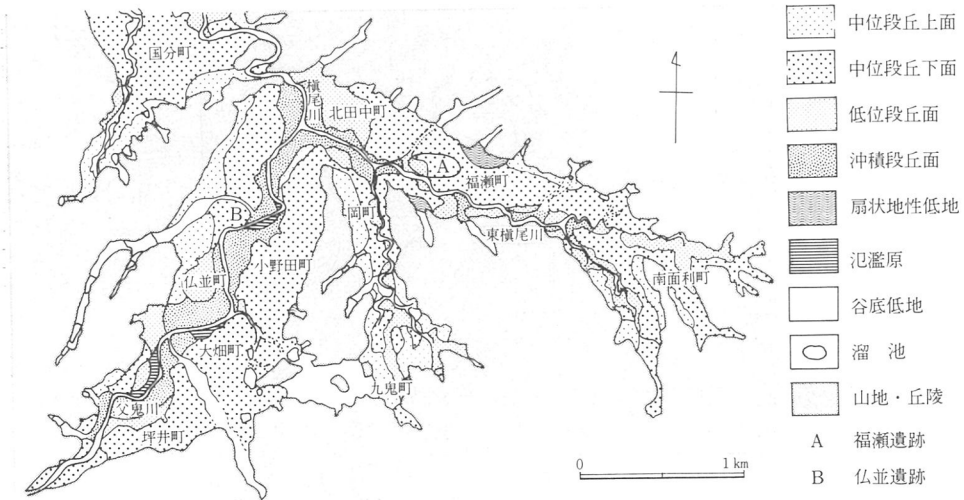
低位段丘は中位段丘の前面に部分的に観察されるが、面積的に占める割合は少ない。父鬼川流域の南部、坪井町付近と父鬼川・東楨尾川の合流点の北田中町付近に比較的広い部分がみられる。沖積段丘は、両河川にそって分布するが、どちらかといえば東楨尾川流域には少ない。氾濫原は、父鬼川流域にわずかに認められるのみである。現状では下位段丘面・沖積段丘面・氾濫原は、大半が水田として活用されている。

山地・丘陵には、両河川の分流・支流によって侵食をうけた多くの小開析谷が枝状に入り込んでいる。これら小谷には、溜池が構築されたり、谷水田として耕作されたりしている場合が多い。また、山地・丘陵部はほとんどが森林となっているが、緩斜面を利用した果樹園もみられ、その前面には扇状地性の低地が形成されている地点もある。

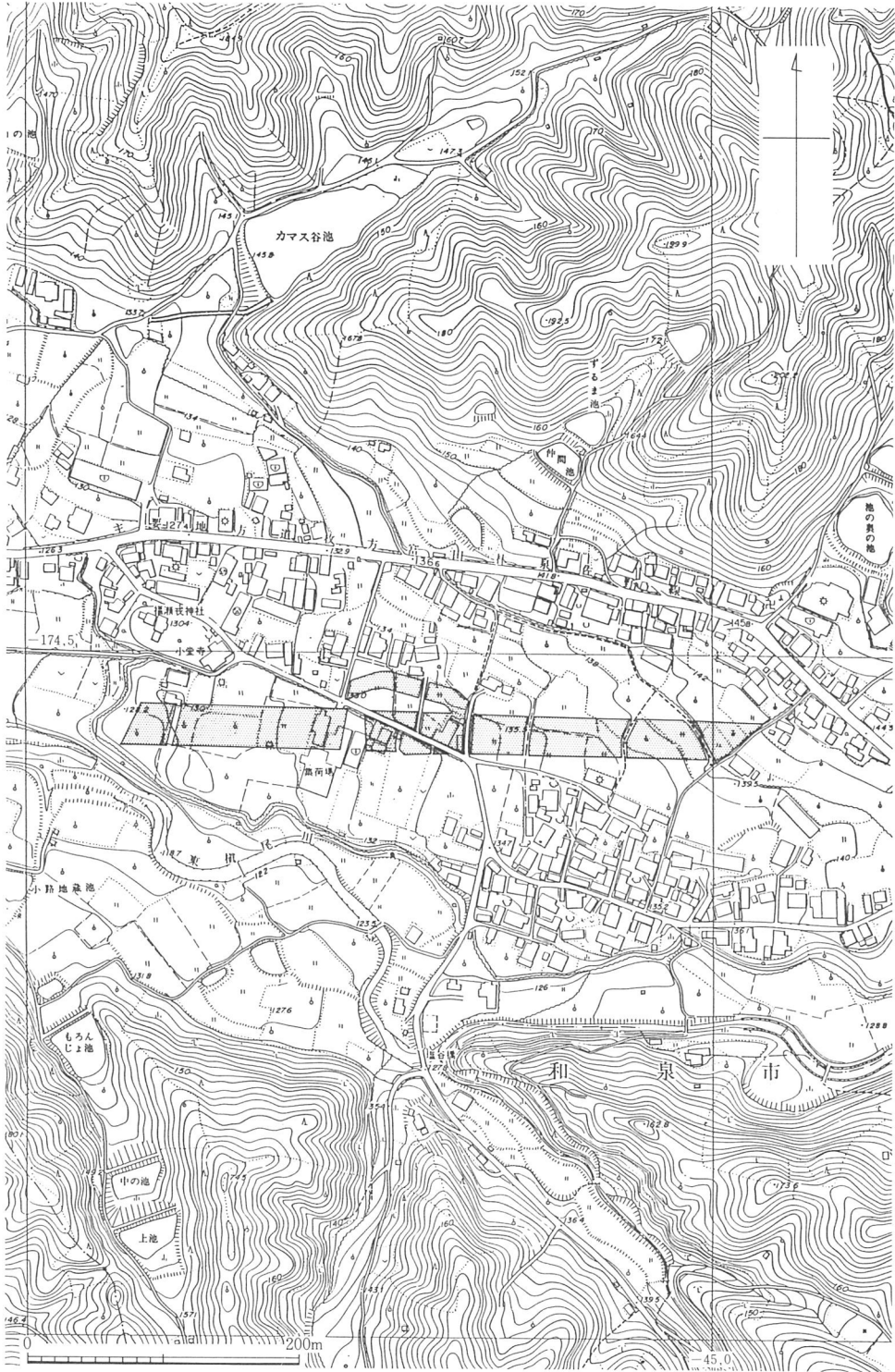
以上のように和泉市域の地形、とりわけ横山谷の地形が複雑であることが知られる。地形環境が複雑であるということは、当然そこに展開される人々の生活もまた複雑・多様化



第2図 福瀬遺跡位置図



第3図 調査地周辺の地形分類 (『仏並遺跡』より作成)



第4図 調査区位置図

していることを示すものといえる。

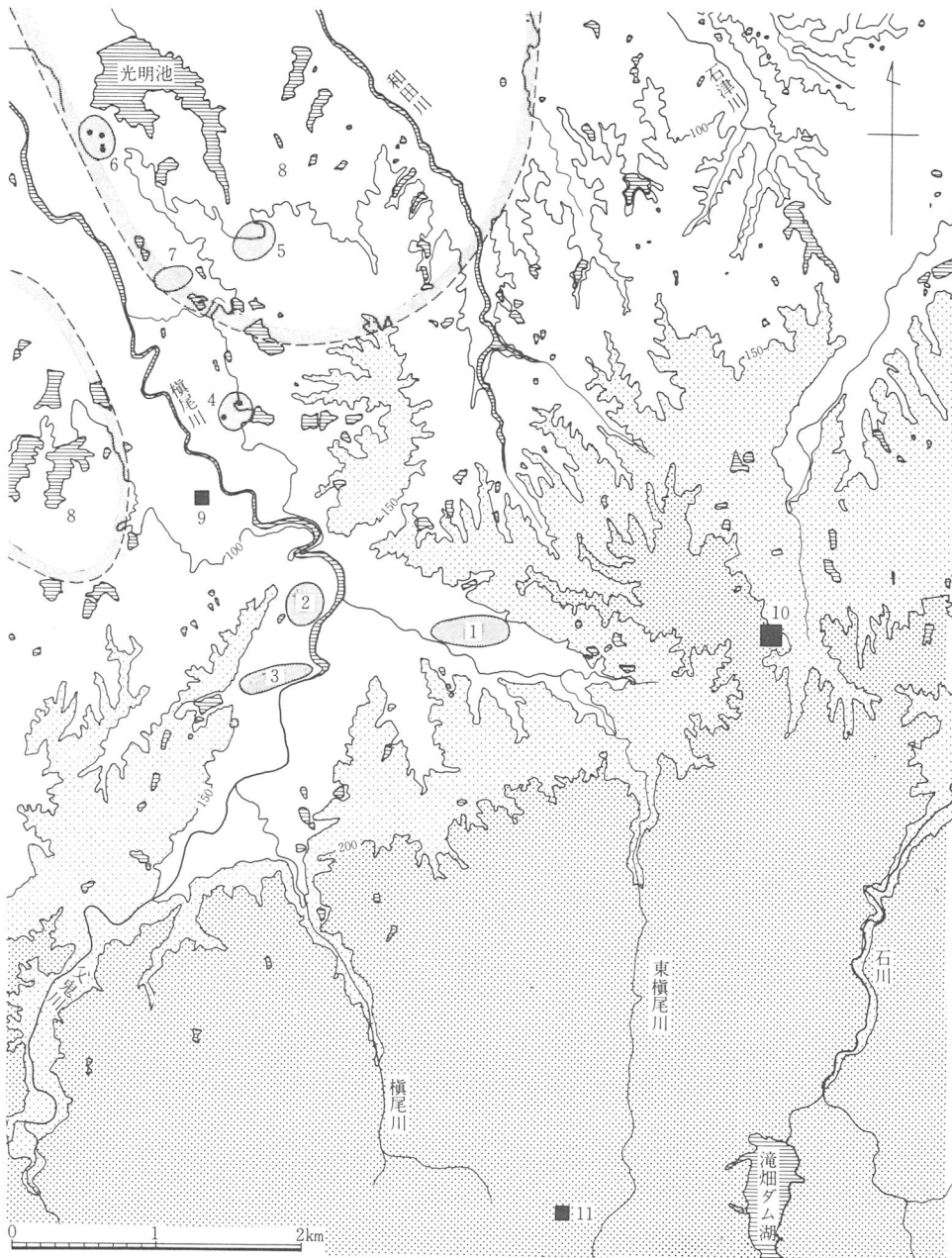
第2節 歴史的環境

福瀬遺跡の立地する横山谷は山地と丘陵に囲まれた地域であり、人々が生活するには必ずしも好条件とはいえない。従って、人々の創意と工夫・技術を特に必要とした地域であったといえよう。すなわち、当地域の歴史を知ることは、こうした悪条件を克服してきた人々の闘い跡の一端を垣間見ることができるのである。以下、横山谷を中心に時代順に概観してみよう。なお、福瀬遺跡周辺には、横山谷以外にも第5図に記したような遺跡をはじめ多数の遺跡が存在する。これらについては、すでに多くのところで説明されているので、割愛するが、なかには系統的に論じられているものもあるので、当地域を知る上でも一読されることを希望する⁽²⁾。また、今回の調査では、特に中世に関連する遺構・遺物が多数検出されていることから、ここでは特にこの時期に主眼をおくことにしたい。

1. 原始

旧石器時代 まず、旧石器時代の遺跡としては、父鬼川の上流、標高390mの山腹に位置する父鬼（大床）遺跡が知られる⁽³⁾。国府文化期よりやや新しいとみられる石器群で、これまでに22点が出土したと伝えられる。さらに、横山谷から父鬼川沿いに登りつめた鍋谷峠から尾根伝いに約3 km西の葛城山々頂でも国府型ナイフ形石器が採集されている⁽⁴⁾。しかし、いずれも断片的な採集資料であり、遺跡の実体等については不明であるが、共に立地条件（山頂部あるいは山頂部からやや下がった山腹）が特異であること、完成された石器が少ないことから、特殊な目的で短期間に利用された露营地のような性格をもった遺跡と推定される⁽⁵⁾。

縄文時代 縄文時代の遺跡は、最近まで知られていなかったが、昭和60年度に今回調査した福瀬遺跡西方約1.5kmに位置する仏並遺跡より大規模な縄文集落が検出され、一躍脚光をあびるに至った⁽⁶⁾。遺跡は父鬼川左岸の中位段丘下面に立地し、縄文時代中期末～後期前半の竪穴住居が多数検出されている。しかも多量の遺物が出土し、時代幅も早期末～晩期までのほぼ全時期のものが含まれている。なかでも、西日本では初例とされる土面が注目される（第6図）。また、今回福瀬遺跡の調査からも縄文時代晩期の土器片と石器類が少量出土し、新たに資料を加えるに至っている。

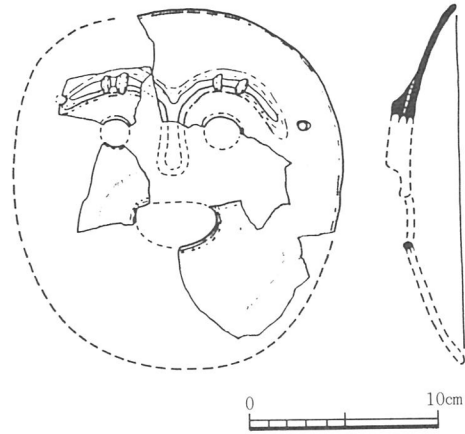


- | | | |
|----------|-----------|------------|
| 1. 福瀬遺跡 | 5. 三林遺跡 | 9. 和泉国分寺 |
| 2. 横山遺跡 | 6. 和田古墳群 | 10. 天野山金剛寺 |
| 3. 仏並遺跡 | 7. 三林古墳群 | 11. 槇尾山施福寺 |
| 4. 黒石古墳跡 | 8. 陶邑古窯跡群 | |

粗網部 海拔150m～200m
 ※ 細網部 海拔200m以上

第5図 周辺の遺跡分布図

弥生時代 弥生時代の遺跡としては、前記の仏並遺跡より、包含層からではあるが、畿内第1様式新段階～第5様式までのほぼ全時期の土器が出土している⁽⁷⁾。仏並遺跡の北方約0.5kmには横山遺跡があり、横山高校の校舎増築工事に伴う調査で、やはり包含層からではあるが、弥生時代中期を中心とする遺物が出土している⁽⁸⁾。福瀬遺跡からも弥生時代の遺物が採集されているし、今回の調査でも中期⁽⁹⁾～後期の土器片及び石器が少量出土している。これらは散発的とはいえ、当地域が山間部に位置し、かならずしも有利ではない自然条件を克服することによって、比較的早くより農耕文化が受容、定着していたことを示している。



第6図 仏並遺跡出土土面（『仏並遺跡』より）

古墳時代 古墳時代の遺跡は、福瀬遺跡から極少量の古墳時代前期～後期の土器が出土しているのみで、横山谷では古墳の存在を含めて他の遺跡は知られていない。最も近い遺跡としては、北西の横山谷の入口たる国分峠をこえて池田谷にはいった榎尾川右岸に（福瀬遺跡から直線にして約2kmの地点）、古墳時代後期に築造されたとされる黒石古墳群がある。従来は数10基あったともいうが、現在は2基を数えるのみである。その内の1号墳（塚穴古墳⁽¹⁰⁾）は、かなり立派な横穴石室をもった古墳で、横穴石室の貧弱な泉州地方においては注目に値する。また、横山谷をこえた北方丘陵地帯には、須恵器の生産で有名な陶邑古窯址群がひろがっている。

2. 古代

和泉国 横山谷一帯は、旧和泉国に属する。和泉国は、もとは河内国の一部とされたが、霊亀2年（716）に大鳥、和泉、日根の3部を分けて和泉監を置いたとされる。監は離宮所在地に置かれたいわゆる特別行政区で、和泉監は和泉宮に関連するものである。和泉監は天平12年（740）に一度廃止されて、再び河内国に合併されたが、河内国の中枢とは隔たり、大阪湾に面して独自の生活圏を構成していたことから天平宝字元年（757）に和泉国として分置されるに至っている。国府は『和名類聚抄』によると和泉郡とあり、現在の和泉市府中に比定されている。

横山郷 横山谷一帯は、和泉国和泉郡内の池田郷に含まれていたが、平安から鎌倉時代にかけて横山郷として分立したとされる。⁽¹¹⁾『行基年譜』⁽¹²⁾行基39歳条に「和泉国和泉郡横山郷内以、横山蜂田寺并四十九院修理料柚被施入」とみえ、慶雲3年(706)文武天皇により、行基建立寺院に材木を供するための柚が当郷内に置かれたことが知られる。

楨尾寺 横山谷の南方、楨尾山には楨尾寺(施福寺)がある。当寺院は『日本霊異記』に「血淳の山寺」とか「珍努の山の山寺」といって紹介されていることから、すでに奈良から平安時代にかけて泉州地方を代表する山岳寺院であったと考えられる。同寺院に伝わる『楨尾寺大縁起』⁽¹³⁾には欽明朝の創建とあるが、信憑性に欠ける。また、空海や覚超などの高僧との関係がさまざまな形で傳承されているが、⁽¹⁴⁾特に覚超は、前記縁起によると柚人の子として横山郷に生まれたとされ、同地に根拠していた池辺氏の出身としている。⁽¹⁵⁾

楨尾寺は経塚群の存在することでも知られる。⁽¹⁶⁾本経塚群は、境内にある楨尾明神社の後背地から、昭和37年の工事中に偶然発見されたものである。遺構の多くは工事によって破壊されたが、保延5年(1139)銘のある経筒をはじめ、経筒外容器(石製・陶製)・銅鏡・水滴・花瓶・小壺・合子等の多数の遺物が出土し、平安時代末から室町時代にかけてさかんに埋経されていたことが判明した。

式内社・国分寺 『延喜式』神名帳には和泉国で62座、そのうち和泉郡で28座の神名があげられていて、その最初に記されているのが男乃宇刀神社2座である。この男乃宇刀神社は横山谷の神社と考えられている。現在の仏並町にある男乃宇刀神社がその1座で、もう1座はもと下宮町にあった八坂神社にあてられている。⁽¹⁷⁾この神社2座の存在は当然ながらこれら神社を祭っていた本貫氏族のいたことを示唆するものといえよう。

一方和泉国府から横山谷にはいる国分峠の手前約1kmには、和泉国分寺が存在する。本寺院は、当初から国分寺として建立されたものではなく、承和6年(839)に従来からあった安楽寺を国分寺としたものである。⁽¹⁸⁾現在は福德寺と呼ばれ、周辺からは多くの古瓦が出土する。和泉国が独立してから80年余も経過してから国分寺として設置されたものであり、しかも国府の所在地からかなり遠距離に位置するなど興味ある問題を残している。なお、国分尼寺は当初より存在しない。

これら以外にも断片的な資料ではあるが、旧石器が出土した父鬼遺跡上面より奈良時代の須恵器が出土したり、今回の福瀬遺跡の調査においても奈良時代後半から平安時代初頭の遺構・遺物が少量検出されている。

3. 中世

横山荘 鎌倉時代の暦仁元年(1238)12月の宣旨によって横山郷全域は槇尾寺領の荘園となっている。⁽¹⁹⁾これ以来、槇尾寺は荘園領主として横山郷一円に不輸権の荘園を領有することになり、併せて荘民をも支配することになったのである。しかし、一方ではすでにこの時期、鎌倉武士政権も確固たるものとなり、特に承久の乱後には全国各地に新補地頭を配し、強化をはかっている。横山荘も例外ではなく、近江の豪族佐々木氏一族の佐々木信綱が補任されている。現在、仏並町には佐々木氏ゆかりの佐々木台（もと常願寺跡とされる）や馬塚・殿前・佐々木街道などの多くの伝承が残っている。

信綱は、仁治2年(1241)2月に横山荘地頭得度を北条政子の追善供養のために高野山金剛三昧とその余剰を父祖らの供養のために蓮華三昧院に寄進している。⁽²⁰⁾槇尾寺は、こうした地頭の設置と、それに伴う荘園侵略に備えて、このころ京都の仁和寺に横山領を寄進し、仁和寺の支配下に入った。その後、槇尾寺は京都の公家社会との関係も密接となり、仏事の面での保護も多く、槇尾寺の全盛時代をむかえるのである。⁽²¹⁾また、当荘は河内国天野山金剛寺に近いことから東槇尾川沿いの南面（現南面利町）には金剛寺僧が相伝する田地があったとされる。⁽²²⁾

南北朝の動乱 鎌倉時代末期から南北朝の対立、及び応仁の乱から戦国期にかけては、公家、武士はもちろん農民までも含めた大変動の時代であった。その影響は、横山荘にもおよんでいることはいうまでもない。荘園領主であり、古代勢力の一つである槇尾寺は没落し、横山荘は荘園領主から独立しはじめる。荘民によって横山谷の各村々が成立していくのもこの時期であり、現在の景観を呈するようになったのもほぼこの時期からであろう。

建武の新政がくずれた後、南朝方・北朝方にそれぞれ分かれて相争い合戦が各地で行なわれたことは周知の通りである。河内の中・南部から和泉の北部地域は南朝方の有力拠点となり、当地の槇尾寺をはじめ、松尾寺、及び横山荘と接する河内の金剛寺、同観心寺等の寺院は南朝方に属し、なかでも金剛寺は後村上天皇の行宮になったりして、南朝方と最も関係が深かったとされる。横山の地はこの金剛寺に接し、しかも南朝方の有力な軍事拠点であると共に、和泉国と河内国を結ぶ交通の要衝であったことなどから、しばしば戦場となっている。

建武2年(1335)10月、横山坪井にて合戦があり延元2年(1337)には1. 4. 5. 10月に横山合戦、延文5年(1360)5月に横山槇尾口合戦等があったとされる。この間の延元元年(1336)南朝は、横山観心が知行していた横山荘内の福岡名・久行名その他を召し上げ、恩

堂として金剛寺の僧実弁に与えている。⁽²³⁾この地を正平14年(1359)南朝の後村上天皇が金剛寺領として安堵している。⁽²⁴⁾以後、横山荘には金剛寺の勢力が強くなりこむようになる。なお、横山荘の土豪と考えられる横山氏は、北朝方についたため横山荘を追われることになる。その後、現和泉市唐国の地に本拠地を移している。⁽²⁵⁾

金剛寺の進出と槇尾寺の衰退 正平9年(1354)後村上天皇は金剛寺を行宮にしたことから、近在の日野や高向及び当横山地域にも南朝軍で宿住するものが多くなったとされる。正平14年(1359)10月には、南朝は横山荘に対する金剛寺の支配を確認している。本来、横山荘は槇尾寺の荘園であったが、南北朝の動乱で同荘の支配がゆるみ、横山氏の動きなどもあって、金剛寺の勢力が横山荘に入ってくるようになった。おそらく金剛寺に地理的に近い東槇尾川流域に支配がのびたのであろう。⁽²⁶⁾まさしく今回調査した福瀬地域がそれにあたる。それに反して、槇尾寺は承和元年(1375)2月には炎上したこともあり、金剛寺に比べて漸次衰退する傾向にあったと考えられる。

南北朝が統一され和泉国の守護は、細川氏庶流2家による併存の形態で固まり、横山谷には守護所の出先機関が設けられていた。その後、応仁の乱が勃発し下剋上の波は当地にもおよんできた。戦国期には守護方の一拠点になっていたらしいが、永正元年(1504)9月25日に、根来勢に攻落されている。天文12年(1543)8月16日には、細川氏綱方の玉井氏が横山の地で合戦し、細川晴元勢に完敗している。

信長・秀吉の登場によって天下統一が進められていくなかで、当地は根来衆の勢力が強いことから信長と対立している。天正9年(1581)4月20日、信長が指出を命じた際、槇尾寺と横山谷の村は山間の地であることを理由に、これに応じなかったことから、槇尾山は焼かれ、破却され、寺領も没収されてしまった。ここに荘園領主としての槇尾寺は名実ともに崩壊し、それに伴って、当地域の近世社会が始まったといえる。

開発と経済基盤 この時期は律令体制が崩壊し、新たに封建体制が確立した時期でもある。地方土豪の支配領域や農民の自立といった生活圏が次々に形成されたのである。かれらの経済基盤はいうまでもなく農業である。新しい農地の開発がさかに行なわれたのはこの時期からである。荒野を耕地化すること。特に水田として開発するには併せて灌漑用水の開発もしなければならない。泉州地域では、灌漑用水を直接河川から得ることは難しく、多くの場合溜池を必要とする。

槇尾川沿いに横山谷と接する池田谷の谷山池や梨子本池はこの時期に築造されたものであり、他にも多くの溜池が構築されたものと想像される。こうした事実は、当然横山谷に

もあったと考えられる。現在横山谷には、他の泉州地域同様多数の溜池が存在するが、これらのうちいくつかは、この時期に構築されたものであろう。

しかし、上記のような開発はあったものの横山谷は、当時はまだかなり山深いところであったことも事実であろう。すなわち、山を利用した生活基盤も根強く残っていたと考えられる。その一つが「杣」である。杣とは木材を供給する場所のことであり、『行基年譜』などにもみられ⁽²⁷⁾、平安から鎌倉時代にかけて、横山谷はこの杣であって、山で生活していた地域と考えられる⁽²⁸⁾。

また、横山谷は横山炭の産地として鎌倉時代から知られていたようである。寛元2年(1244)の成立とされる『新撰六帖』のなかの藤原光俊の和歌には、横山の炭が歌われている。横山炭は白炭を特徴としていたのである。貴族の社会では採暖用に炭を利用していたようで、宮中や公家・寺院などに横山産の炭が多く運び込まれ使用されていたものと考えられる。横山荘は槇尾寺領の荘園であると共に、その上部の京都仁和寺領の荘園でもあったので、横山の炭は槇尾寺の手を経て、仁和寺に送られ、そこから京都の公家社会に入っていたのであろう⁽²⁹⁾。一方、当時は採暖用として炭を利用するのは貴族社会だけであつたので、それ以外では製鉄、鍛造用として利用されることが多かったとされる。横山谷の近くでは、河内国丹南荘の鋳物師が有名である。天正19年(1591)5月には、横山谷として指出が行なわれ、薪、炭などの大坂上納が命ぜられており、その後、江戸時代になっても横山の炭は名品として著名であったようである。

在地土豪 中世横山荘の土豪としては、横山氏・池辺氏・父鬼氏の3氏が知られる。横山氏は名の示す通り横山の地を本貫とする土豪であったと考えられる。『和田文書』のなかの文永9年(1272)「和泉国御家人大番役支配状」によると、鎌倉幕府の御家人であったことが知られる。南北朝には、すでに記したように横山観心の名がみられる。16世紀初めには横山修理亮という人物が登場する。この横山氏は別名岡氏とも呼ばれていることから、現在の岡町を中心とした横山谷北部地域を本拠地としていたものと思われる。福瀬遺跡も横山谷の北部に位置することから、この横山氏と何らかの関係があった可能性が高い。

池辺氏は、仏並町の名称の由来になっている渡来系氏族たる池辺直を祖先とする土豪と考えられる⁽³⁰⁾。池辺氏は代々仏並町に住し、現在も同地に存続していることから、仏並町を中心とした横山谷中、南部地域を本貫地にしていただと考えられる。平安時代の高僧とされる覚超僧都は池辺氏の出身といわれる。同家に伝わる『池辺家文書』の文明7年(1475)の史料によると当時池辺家は横山荘の下司荘官家であり、自己を横山惣領主とか惣長者と

呼んでいる。

父鬼氏は、横山修理と同時代の土豪で、榎尾寺と対立していたことが知られる⁽³¹⁾。同氏は名の示す通り、南西最奥部の現在の父鬼町周辺を本貫地としていたのであろう。

4. 近世以降

検地 秀吉が天下統一を果たした後、文禄3年（1594）8月には検地奉行宮本藤左衛門によっていわゆる太閤検地が実施されている。それによると横山谷として、坪井・仏並・小川・大畠・大野・下宮・福瀬・善正・南面利・中・北田・小野田・岡・側川の14の集落が見え、総反別は、田57町6反余、畠、屋敷8町9反余で、合計66町5反余を測り、名請人数250余数とされている⁽³²⁾。続いて慶長16年（1611）8月の片桐且元を検地総奉行とする検地が行なわれている。この時期各地で村切り⁽³³⁾がさかんに行なわれたが、同19年に横山谷14ヶ村として一括し⁽³⁴⁾、計831石余としている。なお、これらの村名は現在の横山谷の村名とはほぼ同じである。

福瀬村 調査地である福瀬村についてももう少し詳細にみてみよう。文禄3年（1594）の検地帳では、横山谷で一括されているため村高は不明であるが、当村の名請人は57名（屋敷数23）で横山谷で最大である。慶長10年（1605）の和泉国絵図に村名がみえ、296石余、寛永15年（1638）の年貢高は165石余で、そのうち8石は大豆であったとされる⁽³⁵⁾。また、寛永末年頃の状況を記した『和泉国郷村帳』によると285石余、延享元年（1744）の『和泉国村記』によれば314余石の石高であったとされる。江戸時代を通じて幕府領であった場合が多い。

その後 横山谷は明治以降、前記14村が合併し、横山村となり、昭和31年和泉市の成立によってその一部となり、現在に至っている。

以上のように福瀬町周辺はもとより、横山谷は古くから発展した地域であり、しかも周囲が山や丘陵によって囲まれていることから、ある種の独立的な地域を形成してきたといっても過言ではない。それは言い換えれば、開発の波をも遅らせ、それによって豊かな自然環境と多くの歴史的文化財が守られてきた地域であるともいえよう。しかし、一方当地域は旧和泉国と旧河内国を結ぶ主要道である榎尾街道が通り、古来よりかなり開けた地域であったことも十分に想像できる。特に福瀬遺跡はこの榎尾街道に接した要衝の地であることから、横山谷のなかにあっても注目される遺跡といえよう。

註

- (1) 本節作成にあたっては、下記の文献を参考にしている。
- ・和泉市史編纂委員会『和泉市史』第1巻 昭和40年
 - ・大阪府教育委員会『和泉横山谷の民俗』I 昭和50年
 - ・和泉丘陵遺跡分布状況調査会『和泉丘陵遺跡分布調査報告書』 昭和52年
 - ・岸和田市史編纂委員会『岸和田市史』第1巻 昭和54年
 - ・有坂隆道他編集『角川日本地名大辞典27・大阪府』 昭和58年
 - ・(財)大阪府埋蔵文化財協会『仏並遺跡発掘調査報告書』 昭和61年
- (2) 下記の文献が比較的参考になる。
- ・和泉市史編纂委員会『和泉市史』第1巻 昭和40年
 - ・広瀬和雄「和泉北部における古墳群の動向」『大園遺跡発掘調査概要』II 昭和50年
 - ・広瀬和雄「和泉丘陵地区の歴史的環境」『和泉丘陵遺跡分布調査報告書』昭和52年
 - ・岸和田市史編纂委員会『岸和田市史』第1巻 昭和54年
 - ・灰掛 薫「歴史的環境」『和気』 昭和54年
 - ・和泉考古学研究会編『和泉黒石1号墳石室実測調査報告書』血沼2 昭和58年
 - ・石神 怡「まとめー周辺遺跡との関連においてー」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』I (財)大阪文化財センター 昭和59年
 - ・大野 薫「西浦橋遺跡の位置と環境」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』II (財)大阪文化財センター 昭和60年
 - ・岩崎二郎「考古学的環境」『仏並遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 昭和61年
 - ・田中一広「三田遺跡と周辺の環境」『三田遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 昭和62年
- (3) 大阪府史編纂専門委員会『大阪府史』第1巻 昭和53年
- (4) 岸和田市史編纂委員会『岸和田市史』第1巻 昭和54年
- (5) 前掲 註(3)に同じ
- (6) (財)大阪府埋蔵文化財協会『仏並遺跡発掘調査報告書』 昭和61年
- (7) 前掲 註(6)に同じ
- (8) 1972年、大阪府教育委員会調査
- (9) (財)大阪文化財センター『主要地方道枚方・富田林・泉佐野線バイパス(大阪外環状線)予定路線内埋蔵文化財分布調査報告書』 昭和48年
- (10) 和泉考古学研究会編『和泉黒石1号墳石室実測調査報告書』血沼2 昭和58年
- (11) 大阪府教育委員会『和泉横山谷の民俗』I 大阪府文化財調査報告 第26輯 昭和50年
- (12) 『続々群書類従』所収
- (13) 重要文化財、南北朝の書写とされる。
- (14) 空海は当寺院で剃髪得道したと伝えられる。
- (15) 横山谷仏並町には、現在も池辺家が代々存続している。また仏並町の名前の由来も池辺氏の祖先とされる池辺直氷田が蘇我馬子から授かった2体の仏像を私宅に安置したことにはじまるという。
- (16) 秋山進午『和泉槇尾山経塚発掘調査報告書』和泉市久保惣記念美術館 昭和58年
- (17) 八坂神社は、横山中学(現高校)建造のさいに、仏並の男乃宇刀神社に合祀されたとされている。
- (18) 『続日本後紀』 承和6年条
- (19) 「施福寺文書」(『和泉市史』第1巻所収)
- (20) 「高野山文書」(前掲註(19)所収)
- (21) 和泉市史編纂委員会『和泉市史』第1巻 昭和40年
- (22) 「金剛寺文書」(『大日本古文書』所収)

- (23) 「松尾寺文書」(前掲註(19)所収)
- (24) 前掲 註(22)に同じ
- (25) 前掲 註(11)に同じ
- (26) 前掲 註(11)に同じ
- (27) 前掲 註(12)に同じ
- (28) 前掲 註(21)に同じ
- (29) 前掲 註(11)に同じ
- (30) 前掲 註(15)参照
- (31) 前掲 註(19)に同じ
- (32) 「池辺家文書」(『和泉市史』第2巻所収)
- (33) 一地域を多くの村に分けて、各村に庄屋・年寄・百姓代などの村人を置き、支配強化を行なうこと。
- (34) 前掲 註(32)に同じ
- (35) 前掲 註(32)に同じ

第3章 遺 跡

第1節 調査地域の微地形

調査地は、東側から西側にかけてゆるやかに下降・傾斜し、東端部と西端部の比高差は約13mを測る。調査前の状況は、傾斜面を階段状に整地し、果樹園や畑・水田に利用し、E・G地区では家屋も存在した。

遺跡は、東楨尾川右岸の河岸段丘上に位置し、そのひろがりには現福瀬町の中・西部域にあたる。今回の調査は、遺跡内を東西に縦断する形となり、その実体をある程度把握するに至った。調査区は中位段丘下面から、その西側に続く低位段丘面上にまたがる東西約500mの調査区である。B地区の中央部で中位段丘下面と低位段丘面間の北西―南東方向の段丘崖が観察される。この段丘崖は、後世の整地等によって現状では約1mの高低差が認められるのみであるが、土層観察から推定するに、従来は3m前後の落差があったものと思われる。また、調査区の西側から東楨尾川にかけては、沖積段丘面がひろがり、I地区の西側すぐに低位段丘面と沖積段丘面を分ける比高差約7mの段丘崖が存在する。沖積段丘面は現在水田に利用されている場合が多く、2次調査時の試掘の結果では小円礫・砂・シルトから構成され、その西部域は洪水時に冠水する危険性が考えられる。

次に、第7図を参考にしながら調査区とその周辺についてもう少し詳細に観察してみよう。まず、同じ段丘面上であっても、調査区の東半部と西半部では状況はかなり異なる。すなわち、東半部は㊦の谷筋の影響で、その前面に扇状地性の低地が形成されている。㊧の地域がそれにあたり、その西方㊨地域は、東方の堆積作用の影響を受けて谷状の凹部を呈している。そのため地盤は極めて不安定である。今回のA・B・C地区が、この扇状地性低地と凹部の先端地域にあたり、特にA・B地区では現在も湧水が著しく、調査時には困難をきたした。

B地区中央部分に中位段丘下面と低位段丘面を区別する段丘崖が存在することは、すでに記した通りであるが、そのうち中位段丘下面部分を例にとり、現地表面の高低差を観察してみると、A地区東端部とB地区の中位段丘下面西端部との差は約3mを測る。しかし、地山（段丘面）までの深さは、A地区東端部で約3.5m、中位段丘下面西端部で約2.5mであることから（第8図参照）、実際地山上面での東端部と西端部の高低差は約1mに

すぎない。このことは、現在までの整地状況も考慮しなければならないが、それを差引いても従来は現在よりも緩傾斜であったことがうかがえ、また扇状地性の堆積作用が急激であったことを物語っている。この現象は集落立地には適していないが、反面、多くの遺構面が検出される可能性がある。事実、A・B・C地区では複数以上の遺構面が検出されている。

また、㊸の地域においても㊹の谷筋の影響で、㊸ほどではないが扇状地性の堆積が観察される。その堆積作用の最先端が、E・F両地区の東半分にあたり、A・B・C地区同様に遺構面が複数検出された。さらにF地区西半部には、扇状地性堆積作用の影響によって浅谷状の凹部が形成されていた可能性が考えられ、等高線にも若干の乱が認められる。後述する531-OXはその一つである可能性が高く、522-OYなどもこのような凹部を利用したものかもしれない。しかし、地盤の安定性はかならずしも悪くはなく、どちらかといえば、むしろ安定している部類に属するであろう。地山までの深さも1.5mと比較的浅く、堆積作用が徐々に進行していることを示している。

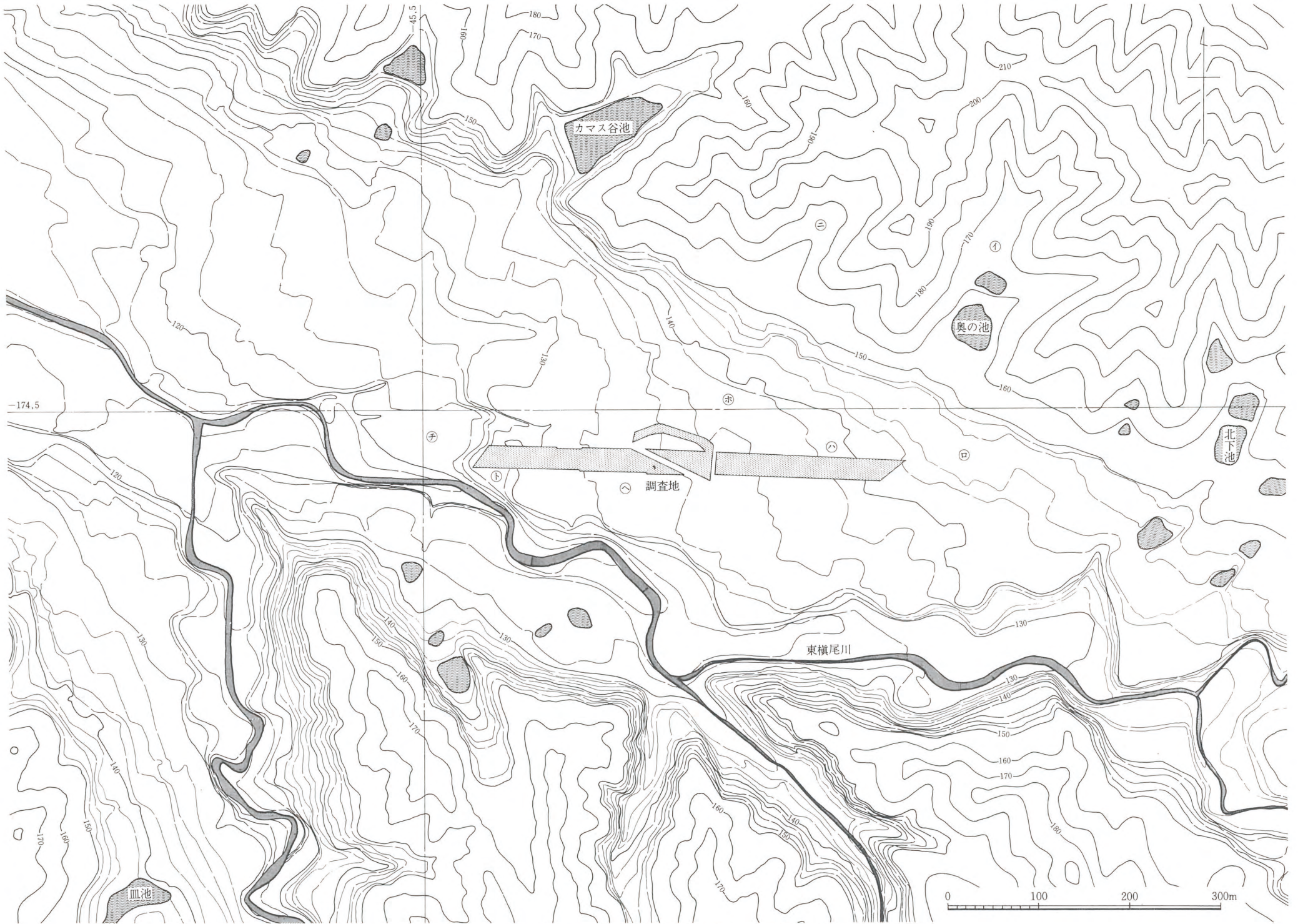
等高線の状況から㊸地域が最も平坦で安定していることがうかがえる。そのため、調査前から集落に関係した遺構群が検出されるものと予想された。すなわち、この地域はH地区にあたり、当初の予測どおり鎌倉時代の建物群が検出された地域である。

H地区西端部から西方にゆるやかに下降・傾斜し、I地区の西側で段丘崖につながるが、その東側でわずかに等高線が北東部方向に湾曲している部分、すなわち小浅谷㊺が観察される。この小浅谷㊺は調査によって検出された800-OXに相当する。㊺の地域は、先に記した沖積段丘面にあたり、現在も侵食が進んでいる。

第2節 層 序

土層断面は、各地区とも現地形の傾斜面に対して直交する方向で観察を実施し、一部については地形に対して平行な状態でも観察を行なった。しかし、調査区が極めて長く、しかも各地点とも複数以上の地点で観察・実測を行なっているため、そのすべてを本書に記載することは紙数の面からも不可能である。したがって、ここでは全体の模式図（第8図）によって概説するに止めたい。

さて、調査区は前節で記した如く複雑な地形を呈する。そのため、層序は各地点によってかなりの異なりをみせるが、基本的には以下のような10層に分層できる。



第7図 調査地周辺微地形 (等高線の単位は実線が10m、破線が2m間隔)である。なお、150m以上は10m間隔のみ

第1層 現代の盛土・耕作土。全域の表土層を形成しており、10～50cmの厚さで堆積するが、耕作土は概ね20cm前後の厚さを測る。

第2層 近世以降の堆積層。旧耕作土・整地土・客土からなり、粘質シルトを基調とする。H地区西西部からI地区東東部にかけては観察されなかったものの、ほぼ全域で観察される。層厚10～30cmを測り、少量の染付陶磁器・土師質土器を包含する。

第3層 中世～近世の堆積層。灰色を呈した粘質もしくは砂質シルトと黄色粘土の2層からなる。前者は、出土遺物から16世紀後半～18世紀代の旧耕作土で、H地区中央部より東側のほぼ全域で観察されている。ただ各地区とも一部検出されなかった部分が認められるが、これは後世の整地によって削平されたためであり、本来は調査地域全面に堆積していたものと考えられる。層厚10～20cmを測り、14世紀～18世紀代の遺物を包含する。後者、すなわち黄色粘土層は主にF地区中・西部に分布し、H地区南西部にも一部堆積する。明らかな2次堆積層であり、整地層と考えられる。F地区西部では前者の下部層を形成する。層厚20cm前後で、16世紀～17世紀代の限定された時期の遺物のみしか出土しないことから、この時期に比較的大規模な土地改良、開発が行なわれたものと思われる。その景観はほぼ現在に近い状態であったと考えられる。なお、本層は第一遺構面のベース層を構成する。

第4層 中世の堆積層。暗褐色の砂質シルト層で、F・G地区以外の各地域で検出されるが、各地区ともかなりの部分で削平されている可能性が高い。層厚10cm～20cmで、12世紀末～14世紀代を中心とした遺物を包含する。概して、調査区の東部及び西端部地域に14世紀代の遺物が多く、中央部から西より部分に13世紀代の遺物が集中する。いわゆる本来の遺物包含層といえるであろう。

第5層 中世の堆積層。黒褐色砂質シルトと明褐色粘質シルトの2層に大別できる。前者はB地区の北東部に、後者はC・D地区の西部側にのみ堆積する。前者には13世紀～14世紀代の遺物を包含するが、後者からは全く出土せず、整地層の可能性も考えられる。

第6層 古墳時代中期～中世の堆積層。淡黄色砂質シルトで、E・F地区中央部より東側の地区で観察され、一部H地区中央部でも検出された。水流堆積と考えられ、その分布状況から第7図の㊷・㊸谷の影響を受けた扇状地作用による堆積層であろう。そのため調査区内では最も影響を受けていると考えられるA・B地区で層厚70cm前後を測り、他の地区では10cm以下と極めて薄い。5世紀後半～13世紀初頭の遺物を包含すると共に、第2遺構面のベース層を構成する。

第 7 層 縄文時代晩期～古墳時代前期の堆積層。茶褐色砂質シルトで、B・C・D地区とE・F地区西部部に分布する。層厚は10～20cmを測り、一見クロボク状の火山灰起源層にみえる⁽¹⁾。極少量の縄文晩期と弥生中期の土器及び布留式土器を包含する。

第 8 層 縄文時代前期～縄文時代晩期の堆積層。礫・砂とその互層から形成され、細分が可能である。層厚は厚く50～200cmを測り、全域に堆積する。炭化した木片を含むのみで、遺物は出土しない。東側は砂の堆積が多いため不安定であるが、西側はよくしまった礫・砂の互層で段丘化している可能性も考えられる。調査区東部の第3遺構面ベース層を形成し、西部側でも遺構面は一面しか検出されなかったが、その唯一の遺構面ベース層にあたる。

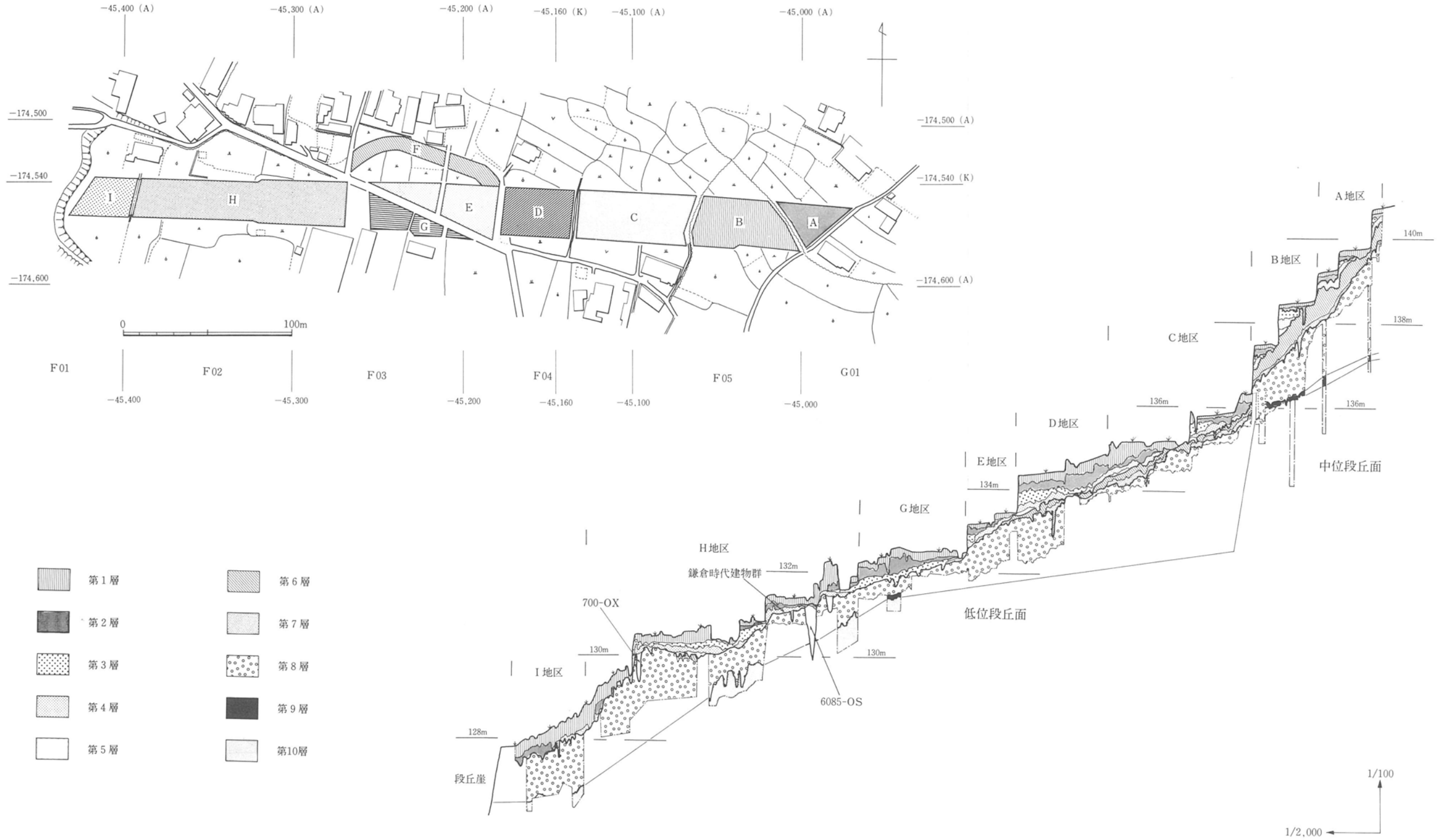
第 9 層 縄文時代前期以前の堆積層。黒茶色のクロボク状を呈した火山灰起源層と考えられるが、横大路火山灰（アカホヤ火山灰）層本体である可能性も残る⁽²⁾。本層は、下層確認のための断割調査のみによって観察したため、その分布は明確ではないが、A・B・G地区でそれぞれ確認している。層厚は10～20cmでB地区の本層上面からは顕著な乾痕が無数に観察された。

第 10 層 段丘層。粘土・砂・礫とその互層によって形成されている。上位層とは不整合の関係にある。断割調査によって確認したのみであるが、B地区より東側、すなわち中位段丘下面部分（掘削範囲内）では、黄褐色の粘土を基調とし、低位段丘面のC・D・E・F・G地区では砂が卓越し、その西方H・I地区では礫が主となる。礫は最大10cm前後で、3cm前後のものが最も多い。

第3節 遺跡の概要

個々の遺構を説明する前に、まず、全体の概要について記しておきたい。遺構面は前節で記したように3面検出した（この遺構面数は調査区全体を通してみた場合であって、各地区ごとに細分して見た場合多少異なる）。

第1遺構面 B地区とF地区中・西部で検出し、他の地区では面的に検出することは不可能であった。検出した遺構は大半が耕作に関係したもので、鋤溝と考えられる素掘り溝群や暗渠等であり、水田の区画がある程度把握できたものもある（08・500-OZ）。また、F地区中央部では、土間と考えられる建物（525-OB）の一面を検出した。これらの遺構の時期は16世紀後葉～18世紀代と考えられるが、遺物の出土量は全体的に少ない。



第8図 地区割及び調査地断面模式図

第2 遺構面 本遺跡の中心遺構面で、全面で検出することができた。遺構面の時期は8世紀～17世紀の年代幅をもつが、中心時期は各地区によって若干の差が認められる。検出した遺構は、調査地の中心部から東側では第1遺構面同様耕作に関係したものが主である。特に鋤溝と考えられる素掘り溝群は、等高線の方向に一致し、当時の耕作状況にある程度理解することが可能である。他に溝・土坑・ピット等があり、これら中央から東部の遺構は概ね13・14世紀代を中心とする時期に属する。

F地区中・西部では、16世紀～17世紀代の屋敷地の一面を検出し、掘立柱建物や柵列・園池等を検出した。また、西端部で同時期の畦畔を伴った水田も検出されている。出土遺物は531-OXより多量の土器類が出土し、園池522-OYからは土器・陶磁器類と共に木製品もかなりの量出土している。

H地区を中心とした調査区の西半部では堀に囲まれた13世紀前半の館跡を検出し、それに伴う掘立柱建物や土坑・溝等と多量の遺物が出土した。また、遺構数は少ないが、古墳時代後期の土坑1基と平安時代中期の遺構が重複して検出されている。

調査区西端部のI地区では、8世紀末と14世紀中葉～後葉の浅谷と土坑・集石遺構等を検出した。特に浅谷(800-OX)からは、多量の土器が出土した。

第3 遺構面 A・B・C地区とE地区東半部・F地区東端部で検出した。検出した遺構は土坑・溝・ピット等であるが、その大半は不定形なもので人為的な遺構とは考えがたい。しかも、遺物を伴うものは極めて少なく、縄文時代晩期の土器片とサヌカイト片及び古墳時代前期の布留式土器と考えられる小片が少量出土するのみである。これらの遺構の埋土は極めてよく似ており、その時期は遺物が示すように、縄文晩期から古墳時代前期とするのが最も妥当であろう。ただ、E地区で平安時代中期の土坑(435-OO)とF地区で奈良時代末から平安時代初頭の土坑(554-OO)が各1基検出されている。また、C地区南西部では他の遺構とは埋土の状況が明らかに異なるピット群も検出されている。このピット群部分では第7層が観察されず、上下の層位から推察して、古墳時代以降、中世(13世紀)以前としか現段階ではいえないが、そのなかでも13世紀前後のピット群の可能性が最も高いといえよう。

以下地区別に報告する。

第4節 A地区

上・下2面の遺構面を検出する。

1. 上層遺構面

ここでいう上層遺構面とは、全調査区を通してみた場合の第2遺構面に相当する。本遺構面はT.P.+140m前後に位置するが、北東部で約50cmの段差をもって1段高くなった面を有する。検出した遺構には溝・土坑・ピットがある。

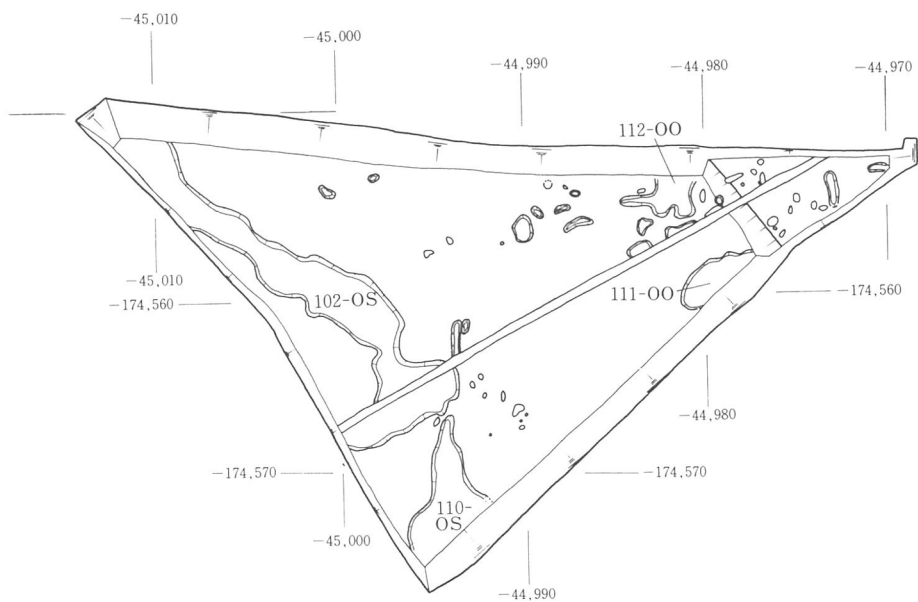
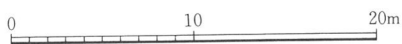
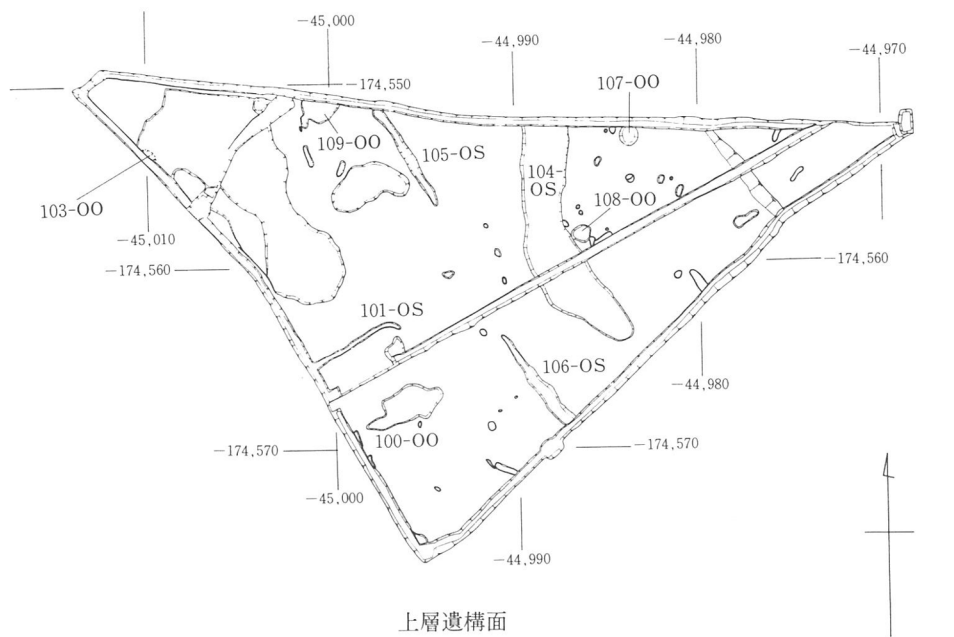
100-00（第9図） 南西部で検出した不定形の土坑である。長径4.5m、短径2.0m、深さ0.25mを測り、底面船底状を呈する。埋土は10Y R4/6褐色の砂質シルトで、16世紀代と考えられる陶磁器・土師器・丸瓦が少量出土する。

101-0S（第9図） 東寄りで検出した北東-南西方向の小溝である。南西側は調査区外にのび、北東側はわずかに東側に屈曲して袋状に終る。総延長約5mを検出し、幅0.3m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで、遺物は出土しない。

103-00（第9図） 北西寄りで検出した平面円形と考えられる土坑であるが、西側は調査区外である。直径1.0m、深さ0.5mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は5Y R2/1黒褐色粘土で、瓦器碗の小片が1点出土した。

104-0S（第9図） 中央部東寄りで検出した南北方向から南東方向に湾曲した溝である。北側は調査区外にのび、南東側は削平のためか袋状に終る。総延長14mを検出し、幅2.5m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R3/2黒褐色砂質シルトで遺物は出土しない。

105・106-0S（第9図） 中央部で検出した北西-南東方向の溝である。105-0Sは北側、106-0Sは南側で検出した。それぞれ調査区外方にのびるが、内側は削平のためか自然に消滅したかたちとなり、一見別個の溝のようにみられるが、従来は一連のつながった溝と考えられる。調査前はこの部分が階段状に整地された段部分にあたることから、整地工事に関係した溝と考えられる。両溝合せて総延長12mを検出し、幅0.5m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は2.5Y5/2灰黄褐色砂質シルトで遺物は出土しなかったが、105-0Sでは杭根列が、106-0Sでは底部に小礫（2～5cm前後）が敷つめられていた。近世初期の年代観が想定される。



第9図 A地区全体図

107-〇〇（第9図） 北側東寄りで検出した平面楕円形の土坑である。長径1.2m・短径1.0m、深さ0.15mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R4/3にぶい黄褐色砂質シルトで遺物は出土しない。

108-〇〇（第9図） 中央部東寄り、104-〇Sの東側で検出した平面円形の土坑である。直径1.0m、深さ0.1mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで遺物は出土しない。

109-〇〇（第9図） 北側西寄りで検出した不定形の土坑である。北側は調査区外であるが、東西幅1.8m、深さ0.15mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は炭化物を含んだ10Y R4/1褐灰色粗砂で遺物は出土しない。

ピット群（第9図） 大半が中央部より東側で検出された。平面円形もしくは楕円形を呈し、径0.1~0.4m、深さ0.1~0.3mを測る。埋土は5Y R2/4灰オリブ色粘質シルトと10Y R4/4褐色粘質シルトもしくは砂質シルトに大別でき、これらは時期差と考えられるが、概して前者ピットが小さい。

2. 下層遺構面

ここでのいう下層遺構面とは、全調査区を通してみた場合の第3遺構面に相当する。本遺構面はT.P.+138~140mの約2mの高低差をもった傾斜面に位置する。検出した遺構には溝・土坑・ピットがあるが、人為的なものは認められない。

102・110-〇S（第9図） 東側で検出した自然流路である。102・110-〇Sは従来は一連の同一流路であった可能性が高い。北西-南東方向に流れ、幅2.0~5.0m、深さ0.1~0.25mを測り、断面U字形を呈する。埋土は基本的に5Y 3/1オリブ黒色礫混り砂質シルトと5Y 4/1礫混り粘質シルトに大別でき、前者が概して北側に、後者が南側に堆積している。遺物は土師器小片（布留式土器？）が極少量出土する。

111-〇〇（第9図） 東側で検出した不定形の落ち込み状の土坑である。東側は調査区外であるが、南北幅2.5m前後、深さ0.1mを測り、底面船底状を呈する。埋土は2~3cm大の礫を含んだ10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで遺物は出土しない。

112-〇〇（第9図） 北側東寄りで検出した不定形の落ち込み状土坑である。北側は調査区外であるが、東西最大幅4.0m、深さ0.1mを測り、底面船底状を呈する。埋土は2~3cm大の礫を含んだ10Y R5/6黄褐色砂質シルトで遺物は出土していない。

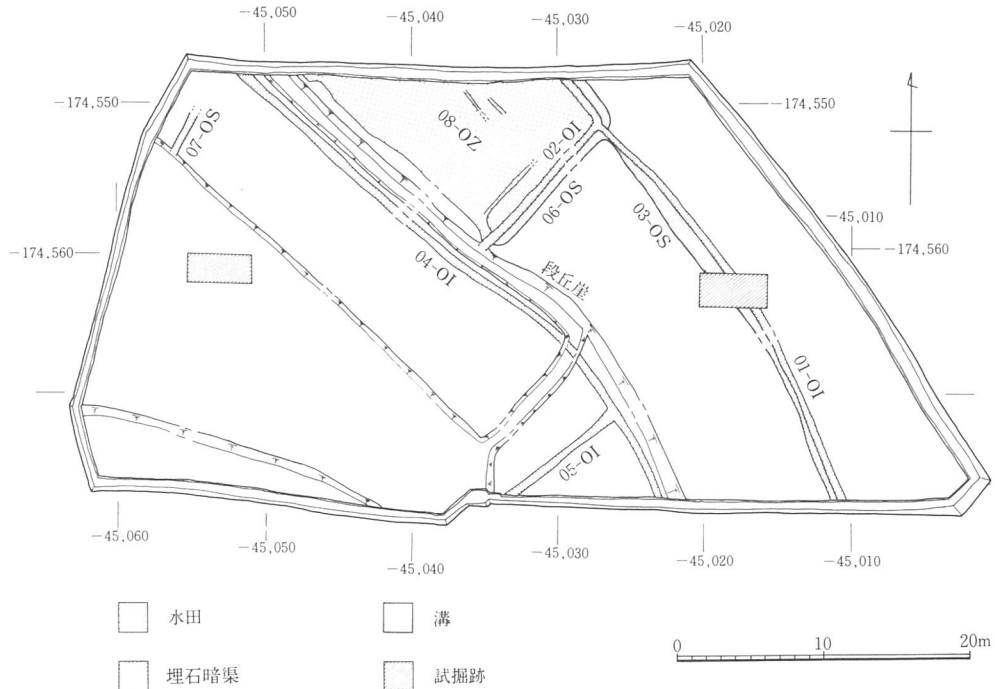
第5節 B地区

3面の遺構面を検出し、さらに明確な遺構面ではないが小規模な下層確認トレンチによって段丘面上の調査も実施した。なお、本地区で検出した3遺構面が全調査遺構面の基準面となっている。

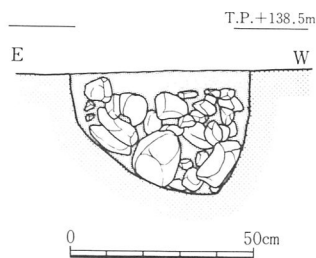
1. 第1遺構面

本遺構面は、現在の景観とあまり大差はなく、大半が耕作面であったと考えられる。耕作面の区画もほぼ同じと思われるが、確実な区画面は1面しか検出できなかった。検出した遺構は、耕作面に伴う暗渠、溝及び水田がある。

01-01 (第10・11図) 東側で検出した北西-南東方向の暗渠である。北西端は02-01とつながり、南東側は調査区外にのびる。総延長30mを検出し、幅0.5m、深さ0.35mを測り、断面U字形を呈する。拳大から人頭大の礫を埋石したもので、16世紀前半の遺物が出土する。03-05と重複し、それより新しい。なお、本暗渠は試掘調査時の第10トレンチで検出された石組溝とされるものである⁽³⁾。



第10図 B地区第1遺構面全体図



02-O1 (第10図) 中央北側やや東寄りで検出した暗渠で、北西方向から南西方向にほぼ直角にまがる。北西側は調査区外にのび、南西側は段丘崖により消滅する。コーナー部分で01-O1とつながる。総延長15mを検出し、幅0.5m、深さ0.3mを測り、断面U字形を呈する。拳大から人頭大の礫を埋石したもので、16世紀前半の遺物が出土する。06

第11図 01-O1南壁断面

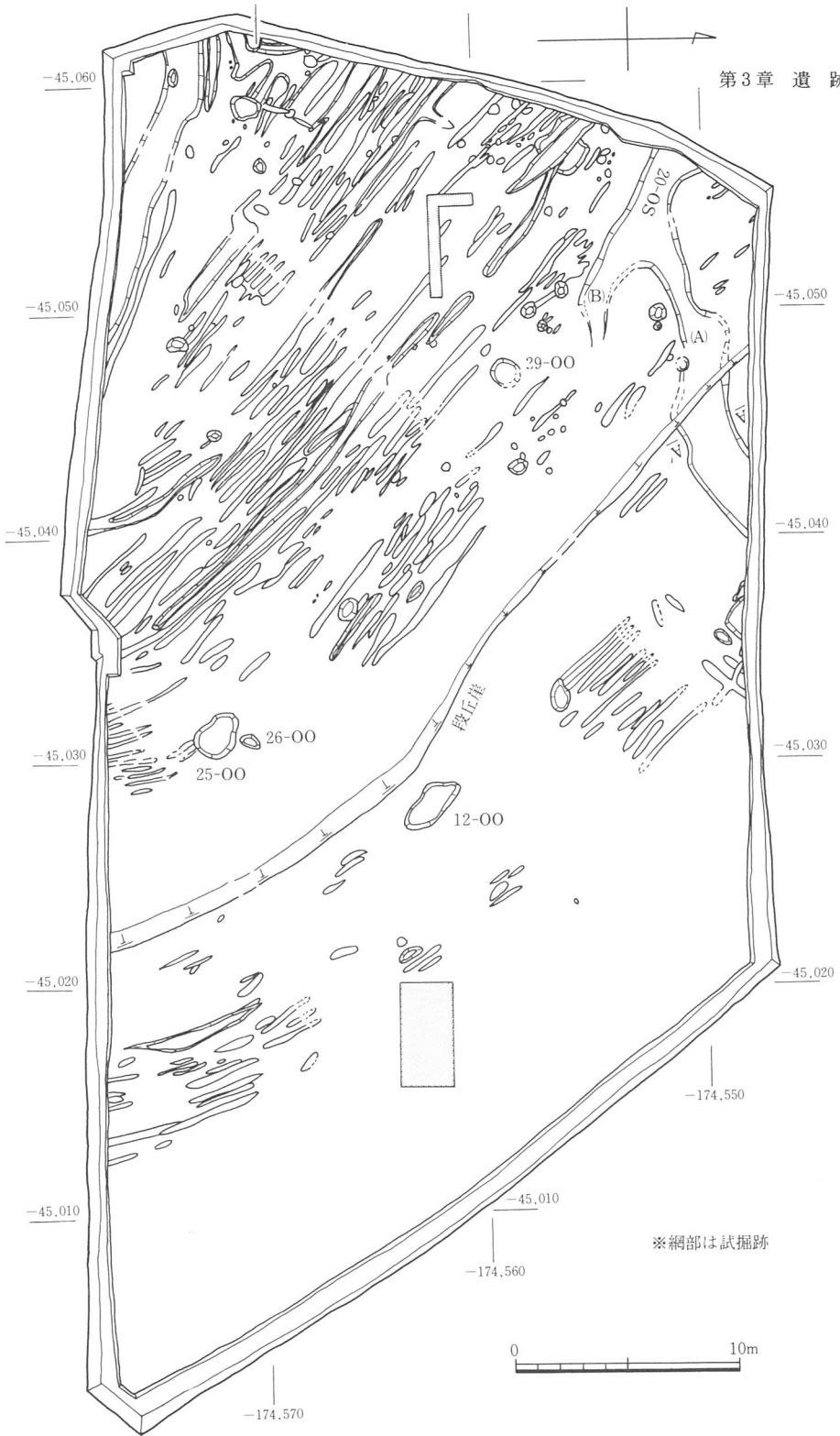
—O5と重複し、それより新しく、08-OZの外周を画するようにめぐらされている。

03-O5 (第10図) 東側で検出した北西-南東方向の溝である。北西端は06-O5とつながり、南東側は調査区外にのびる。総延長30mを検出する。幅については01-O1に切られているため明確ではないが、1.0~1.5m前後と推定される。深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R5/6黄褐色砂質シルトと10Y R5/2灰黄褐色砂質シルトの上下2層に分層でき、土師器小片が出土する。01-O1の前身の溝(暗渠)と考えられる。

04-O1 (第10図) 中央部、段丘崖直下で検出した北西-南東方向に蛇行した暗渠である。両端部は調査区外にのび、南側で05-O1が南西方向に枝分れする。総延長41mを検出し、幅0.5m、深さ0.35mを測り、断面U字形を呈する。拳大から人頭大の礫を埋石したもので、16世紀前半の土器・陶磁器類と瓦及び混入品と考えられる弥生時代中期の石鏃が1点出土した。特に注目されるのは、本暗渠出土の青磁片と約270m離れたH地区の6085-O5中層出土の青磁片が同一個体であることであり、このことからこの地域におけるある一定の開発時期が16世紀頃であることを示唆している。

05-O1 (第10図) 中央部南側で検出した北東-南西方向の暗渠である。北東端は04-O1と直角につながり、南西側は調査区外に延びる。総延長9mを検出し、幅0.5m、深さ0.3mを測り、断面U字形を呈する。拳大から人頭大の礫を埋石したもので16~17世紀代の遺物が出土する。

06-O5 (第10図) 中央北側やや東寄りで検出した北西方向から南西方向に直角に曲る溝である。北西側は調査区外にのび、南西側は段丘崖により自然に消滅する。コーナー部分で03-O5とつながる。総延長15mを検出する。幅については02-O1によって西側肩部が切られているため不明であるが、1.0m前後であったと推定される。深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R4/2灰黄褐色砂質シルトで遺物は出土しない。



第12図 B地区第2遺構面全体図

02-OIの前身の溝（暗渠）であろう。

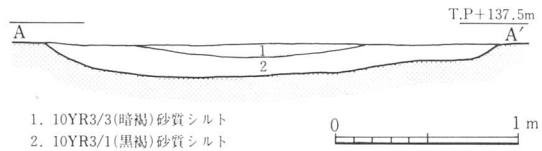
07-OS（第10図） 北西端で検出した北東-南西方向の溝である。両端とも後世の削平のため削減し、総延長3mを検出したにすぎない。幅0.5m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R4/2黒褐色砂質シルトで遺物は出土しない。

08-OZ（第10図） 中央部北側で検出した明確な水田区画である。北西側は調査区外であるが、北東側と南西側は、02-OIと06-OSによって画されている。北東-南西幅11mの規模を測る。06-OSは前記したように02-OIの前身であることから08-OZは両溝（02-OI・06-OS）の存続期間中に存在していたことがうかがえる。本水田の耕土は10Y R6/1褐灰色砂質シルトで、調査時点で10~15cmの厚さが観察され、その上面で鋤溝状の小溝が3条検出された。小溝は北西-南東方向のものが2条、北東-南西方向のものが南東寄りで1条検出されている。小溝幅は10~20cm、深さ5cmを測り、断面U字形を呈する。埋土は2.5Y R5/1赤灰色微砂である。耕土内より極少量の土師器小片が出土する。

2. 第2遺構面

北東方向から南西方向に傾斜・下降した遺構面である。最も高いところでT.P.+138.3m、最も低いところでT.P.+135.9mを測る。検出した遺構は大半が水田に伴う鋤溝と考えられる素掘り溝で、これらは若干のカーブを呈するものの基本的には北西-南東方向を示す。他に溝と土坑がある。

12-OO（第12図） 中央部東寄りで検出した平面楕円形の土坑である。長径3.0m、短径1.2m、深さ0.15mを測り、底面船底状を呈する。



第13図 20-OS土層断面図(実測地点は第12図参照)

埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色礫混り砂質シルトで、遺物は出土しない。

20-OS（第12・13図） 北西側で検出した溝でA溝とB溝に枝分かれます。A溝はわずかにカーブを呈しながら北東から南西方向を示し、両端は調査区外にのびる。B溝は北西-南東方向を示し、南東端は後世の削平のため自然に消滅する。A・B溝合わせて総延長23mを検出し、幅1.0~2.5m、深さ0.2m前後を測り、断面U字形を呈する。埋土は上・下2層に分かれ、遺物は混入品と考えられる弥生時代後期の甕底部片が1点出土した。

25-OO（第12図） 中央部南寄りで検出した平面不定形の土坑である。長径2.3m、

短径1.5m、深さ0.1mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R4/2灰黄褐色礫混り砂質シルトで、瓦器・土師器などの14世紀中頃の土器小片が出土する。

26-00 (第12図) 中央部南寄りで見出した平面楕円形の土坑である。長径1.0m、短径0.6m、深さ0.15mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R4/3にぶい黄褐色粗砂混り砂質シルトで、14世紀中頃の土器小片が出土する。

29-00 (第12図) 中央部西寄りで見出した平面円形の土坑である。直径1.1m、深さ0.2mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は10Y R3/3暗褐色砂質シルトで遺物は出土しない。

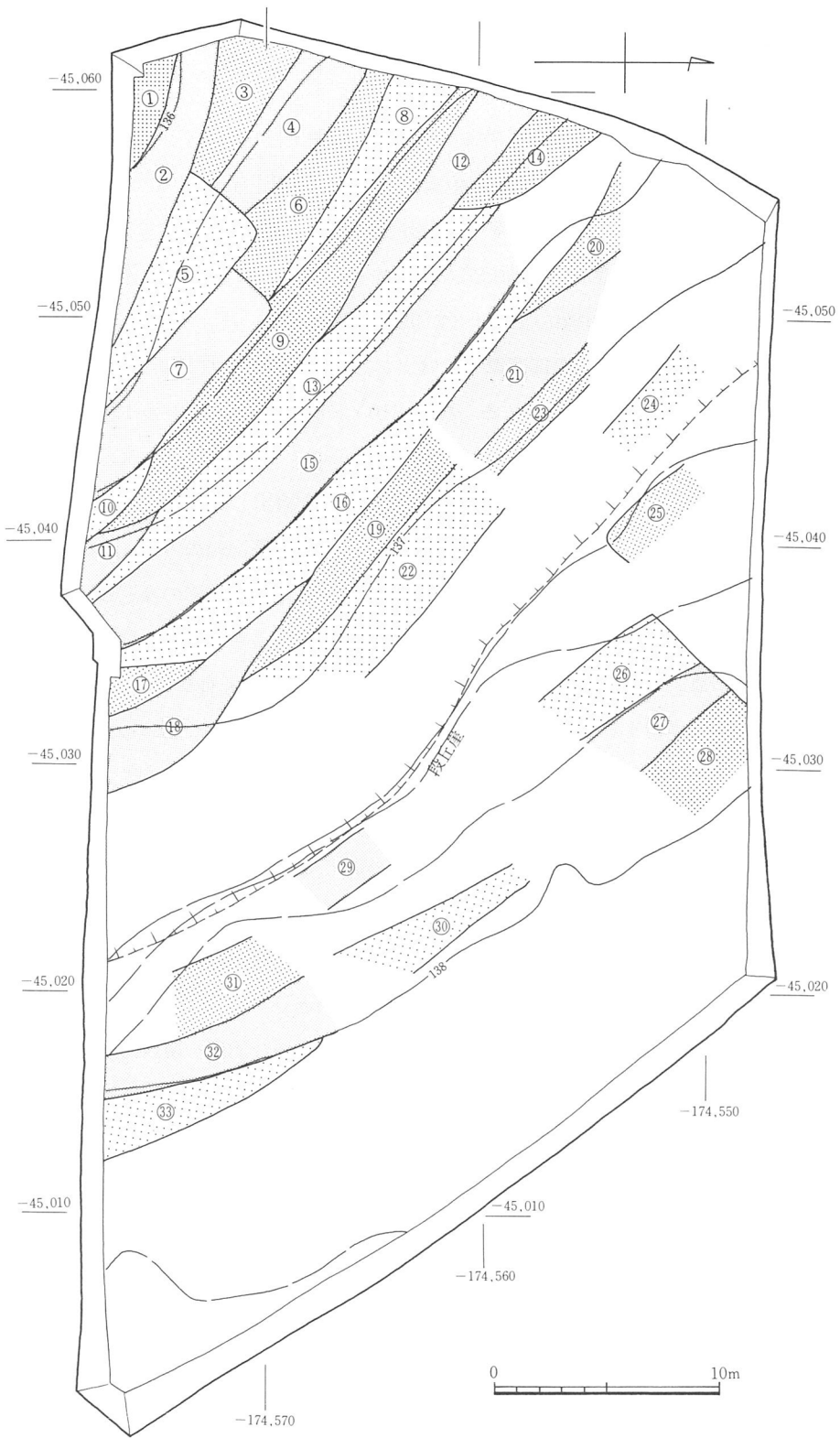
水田(第12・14図) 全域で鋤溝と考えられる小溝を検出した。これらは、本地域が水田面であったことを示すものであろう。溝の方向は地形と等高線の方向にほぼ一致し、本地区では北西-南東方向を示すものが多い。溝の長さは削平・開墾の繰返しなどによって一定ではないが、幅20~30cm、深さ2~5cm前後のものが最も多い。これらは埋土の状況から10Y R4/2灰黄褐色砂質シルトと10Y R4/3にぶい黄褐色砂質シルト及び10Y R4/4褐色砂質シルトが堆積する3群に大別できるが、埋土による時期差は認められない。

地形、溝の状況から、第14図のような①~③の水田区画が推定できる。従来は空白部分にも水田が存在していたと考えられるので、さらに多くの水田が存在していたのであろう。本遺構面は北東方向から南西方向に傾斜した面であることから推定水田区画は北東-南西方向は2m前後と極めて短い。今回の調査では面的に検出することは不可能であったが、これらの水田土層断面を詳細に観察してみると、傾斜面を階段上に整形し構築した水田であることがうかがえる。その段差は、断面観察でみるかぎりでは2~3cmの極わずかなものであり、斜面の方向に対して直角に交わる方向幅(この場合北東-南西方向幅)が短いことなどから、耕地開発の斜面における当時の技術力がある程度示唆される。これら水田の時期は、出土遺物より13・14世紀代と考えられる。

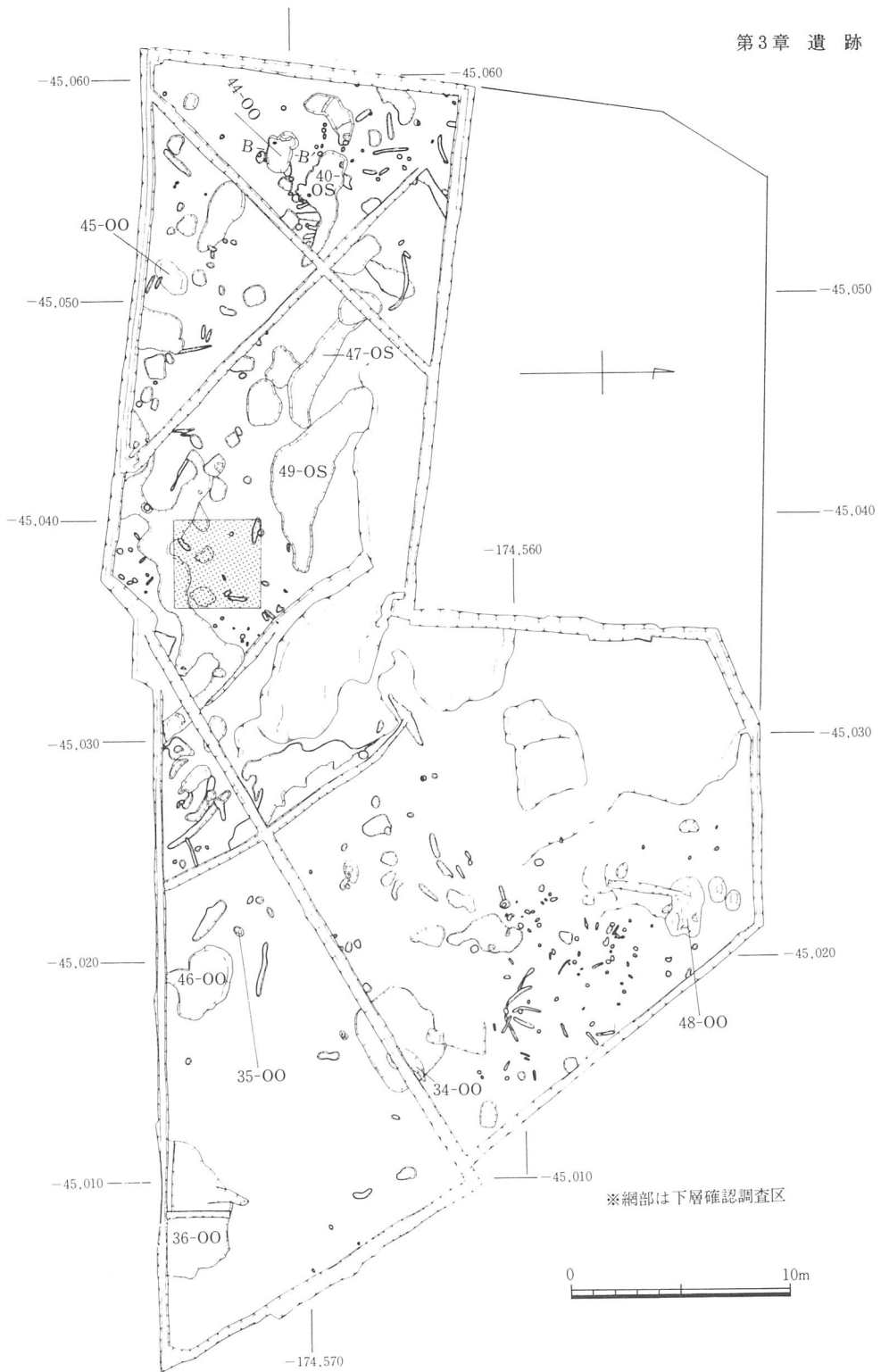
3. 第3遺構面

第1・2遺構面同様、北東方向から南西方向に傾斜・下降した遺構面である。最も高いところでT.P.+138.0m、最も低いところでT.P.+135.5mを測る。調査区の北西部は、地盤不定定、しかも湧水が著しいことから調査を断念している。検出した遺構には溝・土坑・ピットがあるが、これらは人為的な遺構とは考えがたい。

34-00 (第15図) 東側で見出した不定形の土坑である。長径2.0m、短径1.0m、



第14図 B地区第2遺構面推定水田区画



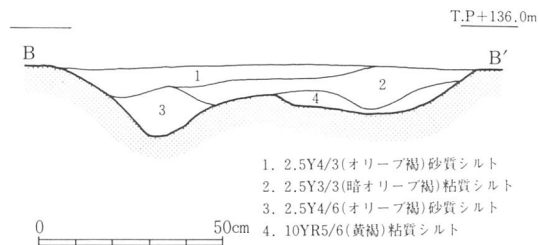
第15図 B地区第3遺構面全体図

深さ0.3mを測り、底面船底状を呈する。埋土は7.5Y5/2灰オリブ色砂質シルトで、縄文土器が出土する。

35-00 (第15図) 中央部南東寄りで検出した平面楕円形の土坑である。長径0.6m、短径0.4m、深さ0.25mを測り、底面逆円錐形を呈する。埋土は2.5Y6/2灰黄色砂質シルトで、縄文時代晩期の土器片が数点出土した。

36-00 (第15図) 南東端で検出した落込み状の土坑がある。南側は調査区外であるが、東西幅5.0m、深さ0.4mを測り、底面は凹凸が著しい。埋土は5Y4/3暗オリブ色粘質シルトと7.5Y4/2灰オリブ色粘土の上下2層に分層でき、下層よりサヌカイト片が2点出土した。

40-0S (第15図) 西側で検出した東-西方向の溝状遺構である。東西長5.5mを測り、両端は袋状に終る。幅0.5~1.5m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は2.5Y5/4黄褐色粘質シルトで、遺物は出土しない。



第16図 44-00土層断面図(実測地点は第15図参照)

44-00 (第15・16図) 西側で検出した平面不定形の土坑である。長径2.0m、短径1.1m、深さ0.2mを測り、底面は凹凸が著しい。埋土は4層に分層でき、遺物は出土しない。

45-00 (第15図) 南西側で検出した平面楕円形の土坑である。長径2.0m、短径1.1m、深さ0.3mを測り、底面は凹凸が著しい。埋土は10YR4/4褐色砂質シルトで遺物は出土しない。

46-00 (第15図) 南側東寄りで検出した平面不定形の落込み状土坑である。長径3.5m、短径2.5m、深さ0.4mを測り、底面は凹凸が著しい。埋土は10YR6/4にぶい黄橙色小礫混り砂質シルトで遺物は出土しない。

47-0S (第15図) 西側やや南寄りで検出した北西-南東方向の溝状遺構である。北西端は不定形の土坑状落込みによって切られており、南東端はわずかに東側に屈曲して袋状に終る。幅0.8~1.2m、深さ0.15mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10YR4/4褐色砂質シルトで遺物は出土しない。

48-00 (第15図) 北東側で検出した平面楕円形の土坑である。長径2.8m、短径1.5

m、深さ1.5mを測り、底面は凹凸が著しい。遺物は出土しなかったが、土坑内全面に2～3cm大の小礫が充填されていた。

49-OS (第15図) 中央部西寄りで見出した北-東方向にカーブを呈した溝状遺構である。北側は湧水による攪乱坑によって切られ、東端は袋状に終る。幅1.0～2.8m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は2.5Y4/4オリーブ褐色小礫混り砂質シルトで、遺物は出土しない。

4. 下層確認調査区

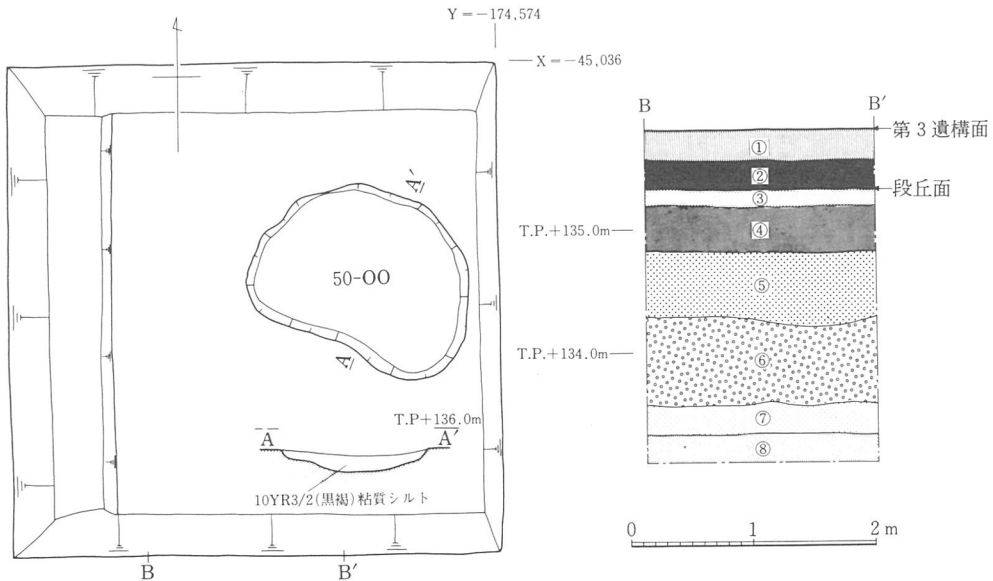
断割り調査以外に中央部南寄りに4×4mの下層確認調査区を設定した(第15図・17図参照)。調査は、第3遺構面より下へ2.7mまで掘削を実施し、その間8層の堆積層が観察された(第17図参照)。

①層は全調査区を通してみた場合の第8層、②層は第9層に相当する。③～⑧層は第10層、すなわち洪積段丘形成層にあたる。以下、各層について列記する。

①層：10Y R5/6黄灰色砂質シルト層で、炭化物・細礫を含む。層厚約25cmを測る。

②層：10Y R2/2黒褐色砂質シルト層で、細～大礫を含む。層厚約25cmを測る。

③層：10Y R5/3にぶい黄灰色シルト混り砂礫層で、砂は中～極粗砂、礫は中礫が多い。層厚約15cmを測る。



第17図 下層確認調査区

④層：7.5Y R6/3にぶい褐色砂礫層で、礫は細～大礫である。含水が著しい。層厚約40cmを測る。

⑤層：5 B G6/1青灰色砂礫層で、砂は粗粒ないし極粗粒、礫は亜円礫ないし円礫の細～中礫である。層厚55cmを測る。

⑥層：10Y R6/3にぶい黄橙色細礫質粗粒砂層で、中礫を含む。下部はよくしまり、層厚65cmを測る。

⑦層：10Y R6/1褐灰色砂礫層で、砂は中～極粗粒、礫は中～巨礫の亜角礫である。層厚25cmを測る。

⑧層：7.5Y5/1灰色砂礫層。礫は細～大礫で含水が著しい。層厚20cm以上を測る。

③層上面において平面不定形の土坑（50-00）を検出した。長径1.8m、短径1.3m、深さ0.15mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R3/2黒褐色粘質シルトで遺物は出土しない。本土坑は、人為的な遺構とは考えられないが、当地区に限っていえば、段丘面上にも遺構の存在する可能性が高いといえよう。

第6節 C地区

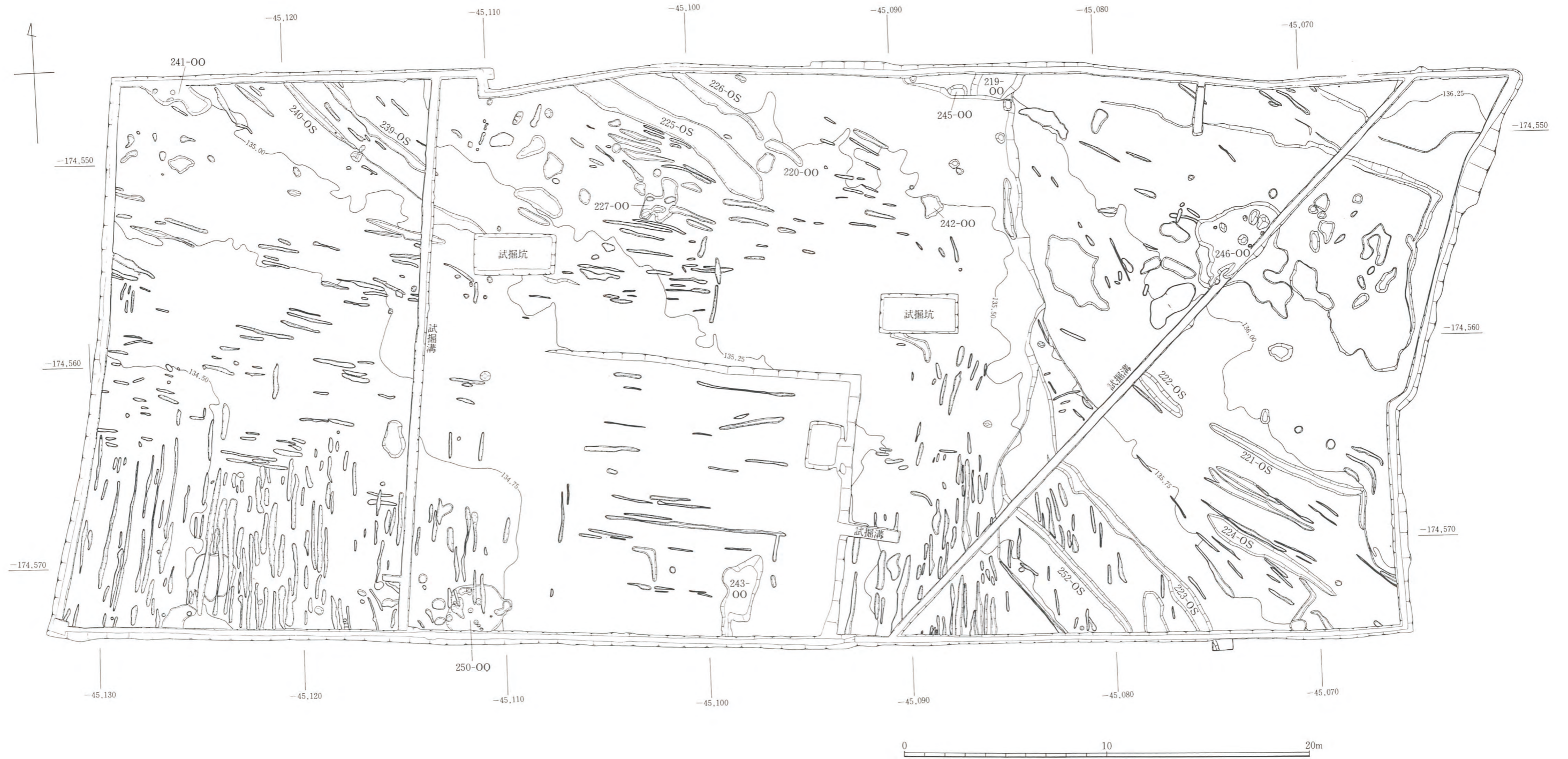
上・下2面の遺構面を検出した。

1. 上層遺構面

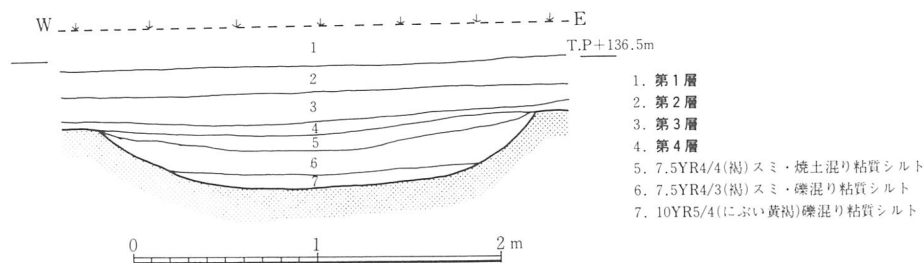
ここでいう上層遺構面とは、全調査区を通してみた場合の第2遺構面に相当する。本遺構面は北東方向から南西方向に傾斜・下降する面で、最も高いところでT.P.+136.3m、最も低いところでT.P.+134.3mを測る。検出した遺構は、B地区同様水田耕作に伴った鋤溝と考えられる素掘り溝群であり、これらは地形、等高線に一致する。ちなみに本地区の等高線は北西方向から南東もしくは南方向にカーブ状に走る。他に溝・土坑がある。

219-00（第18・19図） 北側中央部やや東寄りで見出した平面楕円形の土坑と考えられるが、北側は調査区外、南側は後世の整地によって切られている。短径2.0m、深さ0.3mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は3層に分層でき、遺物は出土しない。

220-00（第18図） 中央部北寄りで見出した平面不定形の土坑である。長径2.1m、短径0.5m、深さ0.1mを測り、底面船底状を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色小礫混り砂質シルトで、土師器の小皿片が1点出土した。



第18図 C地区上層遺構面全体図



第19図 219-〇〇北壁土層断面図

221・222-〇S (第18図) 東側南寄りで検出した北西-南東方向の溝で、それぞれ別溝のように検出されたが、本来は一連のつながった溝であったと考えられる。221-〇Sの南西部は、ほぼ直角に南側に屈曲し、袋状に自然消滅する。幅0.2~0.7m、深さ0.15mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R4/4褐色砂質シルトで遺物は出土しない。後述する推定水田(第20図参照)㊸-〇Zの北東、南西を画する溝と考えられる。

223-〇S (第18図) 南東側で検出した北西-南東方向の溝である。北東端は自然に消滅し、東側肩部のみがそのまま残存し段状を呈する。南東側は調査区外へのびる。幅0.3~0.8m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R4/4褐色砂質シルトで、土師器小片が出土する。推定水田㊸-〇Zと㊹-〇Zを画する溝と考えられる。

224-〇S (第18図) 南東端で検出した北西-南東方向の溝である。両端部は袋状に自然に消滅する。総延長7.5mを検出し、幅0.3~0.7m、深さ0.2mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R5/6黄褐色砂質シルトで遺物は出土しない。推定水田㊺-〇Zの南東側を画する溝と考えられる。

225-〇S (第18図) 北側中央部で検出した北西-南東方向の溝である。北西側は調査区外へのび南東端は袋状に自然に消滅する。総延長10mを検出し、幅1.0~1.5m、深さ0.1mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで遺物は出土しない。推定水田㊻-〇Zと㊼-〇Zを画する溝と考えられる。

226-〇S (第18図) 北側中央部で検出した北西-南東方向の溝である。北西側は調査区外へのび南東端は袋状に自然に消滅する。総延長6.0mを検出し、幅0.2~0.6m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで遺物は出土しない。推定水田区画㊽-〇Zの北東側を画する溝と考えられる。

227-〇〇 (第18図) 中央部北寄りで検出した平面不定形の落込み状の土坑である。長径2.2m、短径1.3m、深さ0.25mを測り、底面の凹凸は著しい。埋土は焼土・炭化物を

多く含んだ7.5Y R4/4褐色粘質シルトで遺物は出土しない。

239-O S (第18図) 北西側で検出した北西-南東方向の溝である。北西側は調査区外にのび、南西端は自然に消滅する。総延長7.5mを検出し、幅0.3~0.5m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R5/3にぶい黄褐色砂質シルトで遺物は出土しない。推定水田区画65-O Zと67-O Zを画する溝と考えられる。

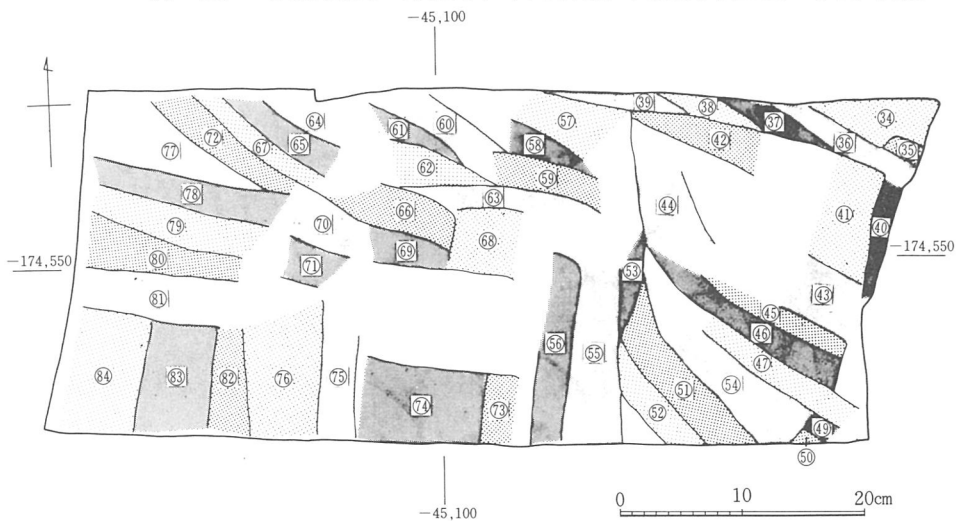
240-O S (第18図) 北西側で検出した北西-南東方向の溝である。北西側は調査区外にのび、南西端は自然に消滅し、東側肩部のみがそのまま残存し段状を呈する。幅0.4m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R4/4褐色砂質シルトで遺物は出土しない。推定水田区画67-O Zと72-O Zを画する溝と考えられる。

242-O O (第18図) 中央部北東寄りでは検出した平面不定形の土坑である。長径1.2m、短径1.0m、深さ0.1mを測り、底面は凹凸している。埋土は、炭化物を多量に含んだ10Y R6/3にぶい黄橙色砂質シルトで、遺物は出土しない。

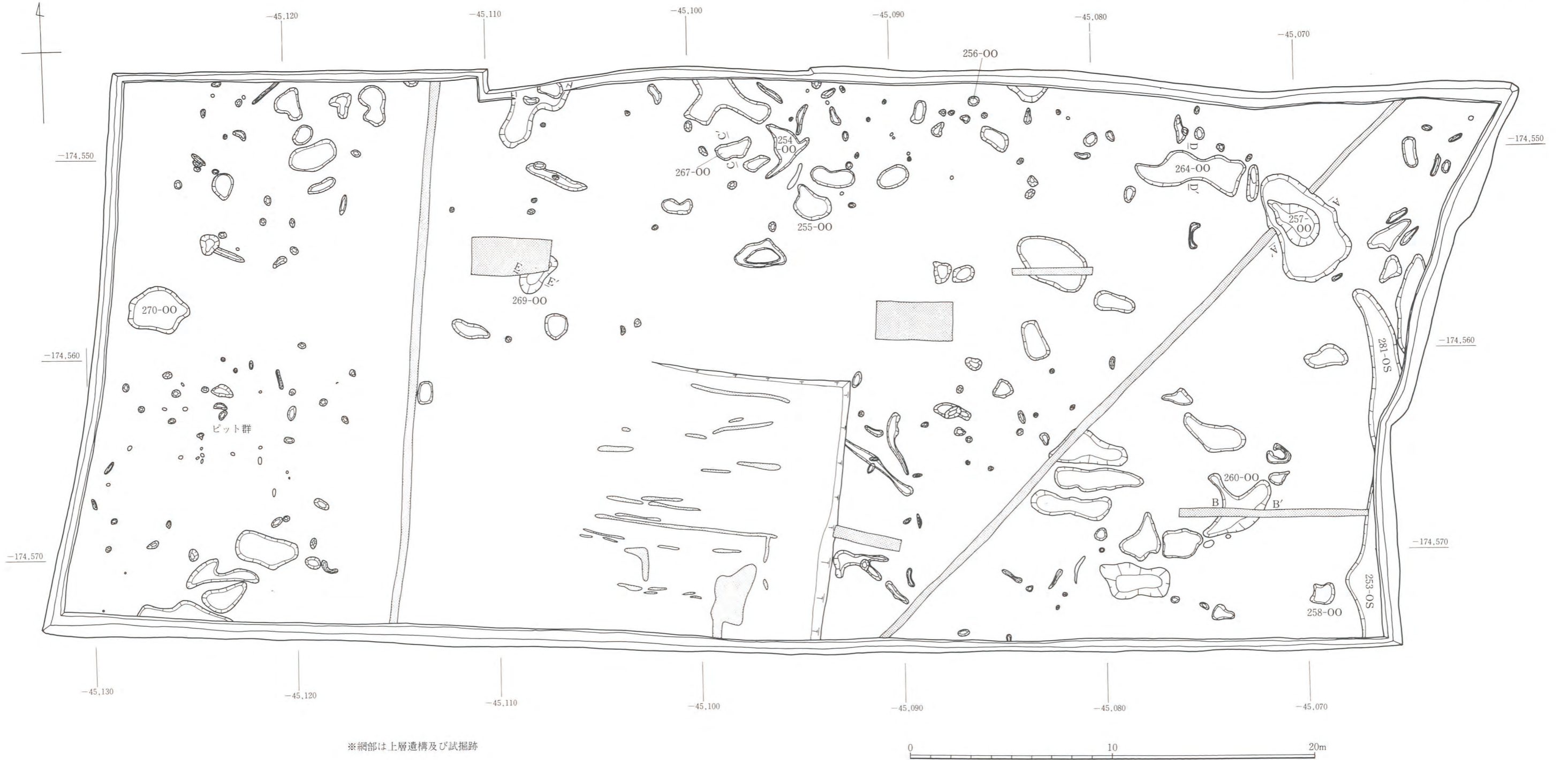
243-O O (第18図) 南側中央部で検出した平面不定形の土坑である。長径3.5m、短径1.4m、深さ0.2mを測り、底面船底状を呈する。南端部からは溝状のものが派出し、調査区外にのびる。埋土は10Y R5/1灰褐色粘質シルトで、土師器片が少量出土する。

245-O O (第18図) 北側中央部東寄りでは検出した平面円形と考えられる土坑であるが、南側は後世の整地によって削平されている。直径1.0m、深さ0.2mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで瓦器・土師器片が出土する。

246-O O (第18図) 東側北寄りでは検出した平面不定形の落込み状土坑である。長径6.5



第20図 C地区推定水田区画



第21図 C地区下層遺構面全体図

m、短径5.0m、深さ0.3mを測り、底面は凹凸が著しい。埋土は10Y R2/3黒褐色砂質シルトで遺物は出土しない。

250-〇〇（第18図） 南側中央部西寄りで検出した平面ほぼ円形の土坑である。直径2.5m、深さ0.1mを測り、底部は凹凸が著しい。埋土は、焼土・炭化物を多量に含んだ10Y R3/4暗褐色砂質シルトで遺物は出土しない。

水田（第18図・20図） B地区同様当地区全域で鋤溝と考えられる素掘り溝群を多数検出した。これらは本地区の大半が水田であったことを示すものであろう。溝の方向は地形・等高線に一致することは、すでに記した通りであるが、基本的に北半部と南東部は北西-南東方向、南側中央部は東-西方向、南西部は南-北方向を示す。幅は20cm前後、深さ2～3cm前後のものが最も多い。これらは埋土の状況により、10Y R4/4褐色砂質シルトと10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルト及び2.5Y R4/2暗灰黄色砂質シルトの3群に大別でき、概して前者は北西部と南東部、中者は中央部北側、後者は南西部に多い。しかし、埋土による時期差は認められない。

地形、溝の状況等から第20図のような㉔～㉕の水田区画が推定できる。その状況はB地区第2遺構面検出の水田群と同様であり、出土遺物から13・14世紀の水田面と考えられる。

2. 下層遺構面

ここでいう下層遺構面とは、全調査区を通してみた場合の第3遺構面に相当する。本遺構面は、上層遺構面同様北東方向から南西方向に傾斜・下降する。最も高いところでT.P.+136.0m、最も低いところでT.P.+134.0mを測る。検出した遺構には土坑・溝・ピットがある。特に一見土坑とみられるものの大半は自然の落込みで、人為的なものはほとんどみられない。

253・281-〇S（第21図） 東端部で検出した南-北方向の溝状遺構である。253-〇Sと281-〇Sは一つにつながった一連の遺構と考えられる。東側の肩部と南側は調査区外にのび、北端部は袋状に自然消滅する。総延長17.5mを検出し、幅1.5m～2.0m前後、深さ0.1mを測る。埋土は10Y R2/3黒褐色小礫混り砂質シルトで、縄文時代晩期の土器少量とサヌカイト片1点が出土した。

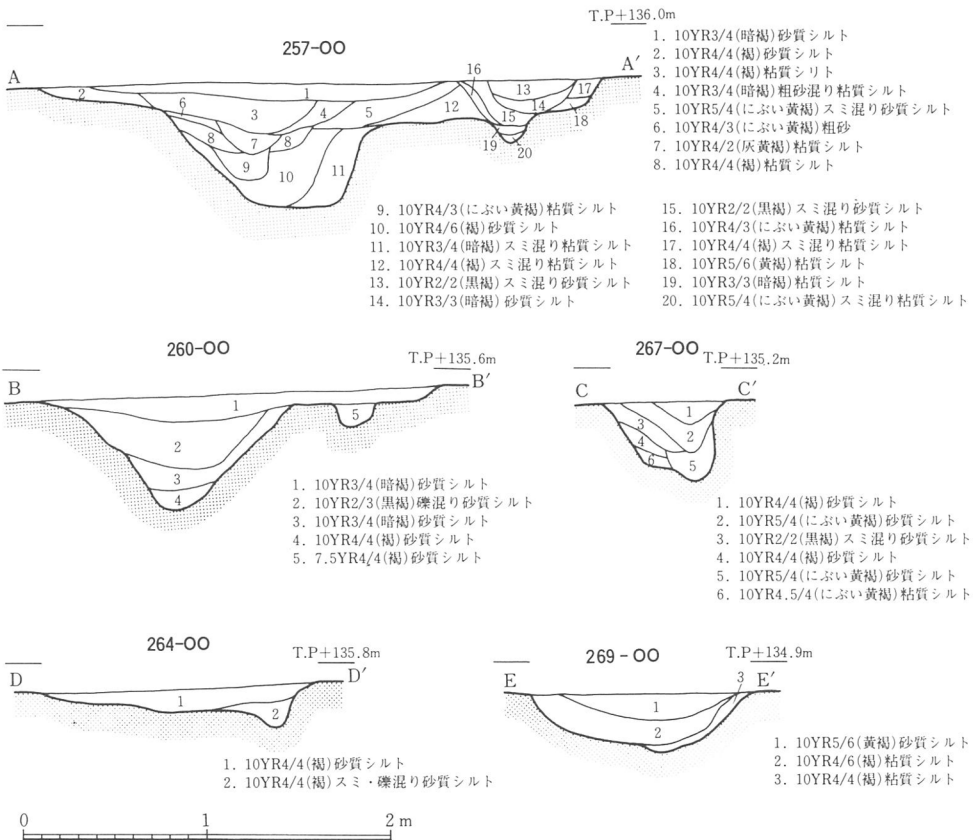
254-〇〇（第21図） 北側中央部で検出した平面不定形の土坑状遺構である。長径2.5m、短径1.3m、深さ0.4mを測り、断面V字形を呈する。埋土は10Y R4/4褐色砂質シルトで遺物は出土しない。

255-〇〇（第21図） 中央部北側で検出した平面不定形の土坑状遺構である。長径2.0m、短径1.3m、深さ0.1mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R4/4褐色砂質シルトで、サヌカイト片が2点出土した。

256-〇〇（第21図） 北側東寄りで検出した平面楕円形の土坑状遺構である。長径0.6m、短径0.4mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は7.5Y 4/6褐色礫混り砂質シルトで、摩耗した縄文時代晩期の土器片が少量出土する。

257-〇〇（第21・22図） 北東部で検出した平面不定形の土坑状遺構である。長径5.5m、短径3.0m、深さ0.7mを測り、底面は凹凸が著しく2段に掘り窪められた状態を呈する。埋土は実測地点で20層に細分でき、遺物は出土しない。

258-〇〇（第21図） 南東端で検出した平面不定形の土坑である。直径1.1m、短径0.9m、深さ0.15mを測り、底面は凹凸が著しい。埋土は10Y R2/3小礫混り砂質シルトで、サヌカイト片が1点出土した。



第22図 C地区下層遺構面検出土坑群土層断面図（実測地点は第21図参照）

260-〇〇（第21・22図） 南東端で検出した平面不定形の土坑である。長径4.2m、短径1.5m、深さ0.6mを測り、断面V字形を呈するが、東側は2段掘り状を呈する。埋土は5層に分層でき、遺物は出土しない。

264-〇〇（第21・22図） 北東側で検出した平面不定形の土坑状遺構である。長径5.5m、短径1.5m、深さ0.2mを測り、底面は凹凸が著しい。埋土は上下2層に分層でき、遺物は出土しない。

267-〇〇（第21・22図） 北側中央部で検出した平面不定形の土坑状遺構である。長径1.8m、短径0.8m、深さ0.4mを測り、底面船底状を呈する。埋土は6層に分層でき、遺物は出土しない。

269-〇〇（第21・22図） 中央部北西寄りで検出した平面楕円形と考えられる土坑状遺構であるが、北側は試掘坑によって切られている。長径2.3m、短径1.2m、深さ0.35mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は3層に分層でき、遺物は出土しない。

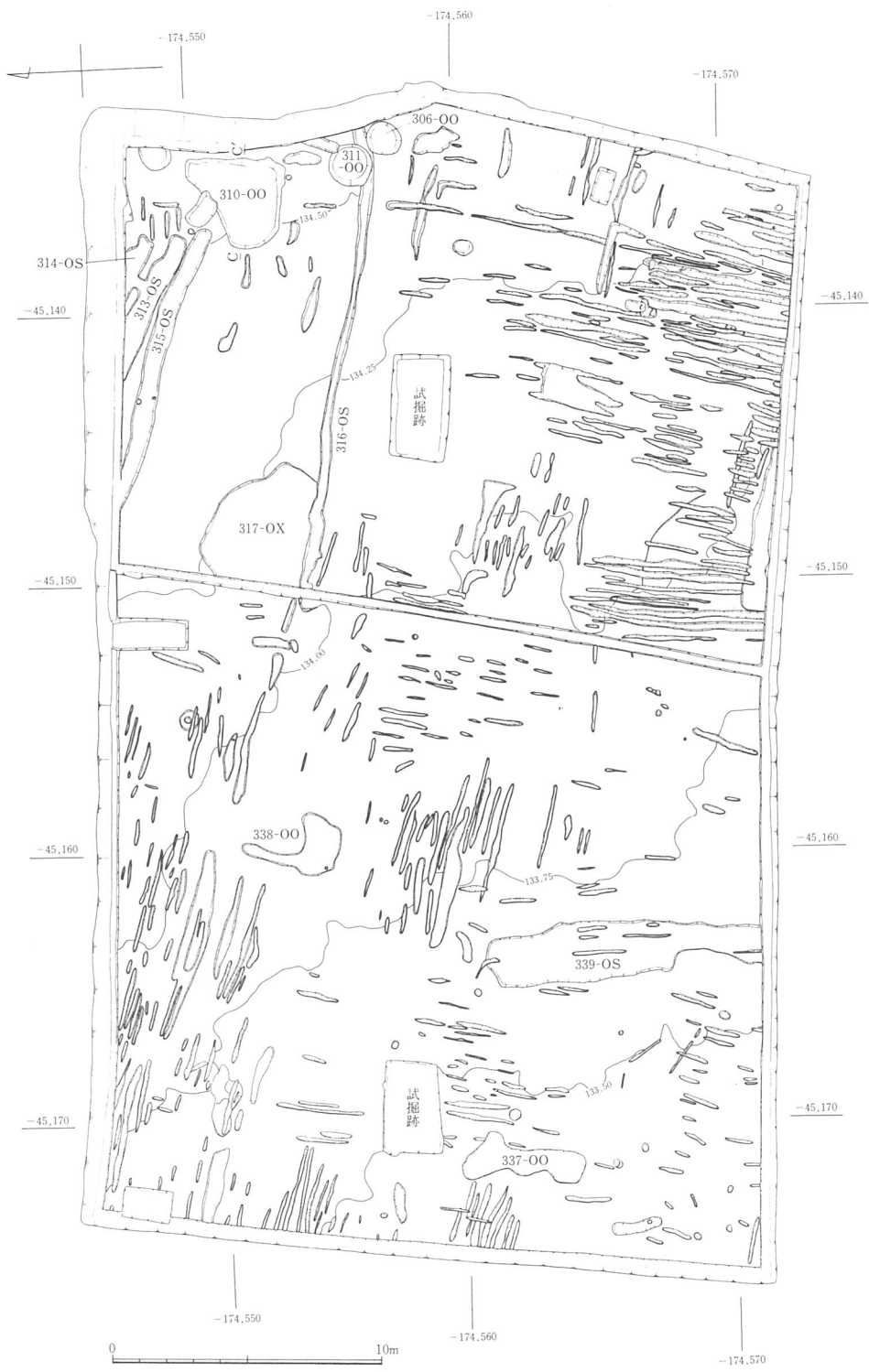
270-〇〇（第21図） 西側で検出した平面不定形の土坑である。長径3.0m、短径2.1m、深さ0.1mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R4/4褐色礫混り微砂で、遺物は縄文土器片が少量出土した。

ピット群（第21図） ピットはほぼ全域で見られるが、西側中央部で検出したピット群中には柱穴と考えられるものが認められる。これらは黒褐色もしくは褐色を呈した粘質シルトで、直径0.2～0.3m、深さ0.2m前後を測る。時期については、遺物が出土していないので、明確にはできないが、層位的にみるかぎりでは、古墳時代以降、鎌倉時代前半までと考えておきたい。

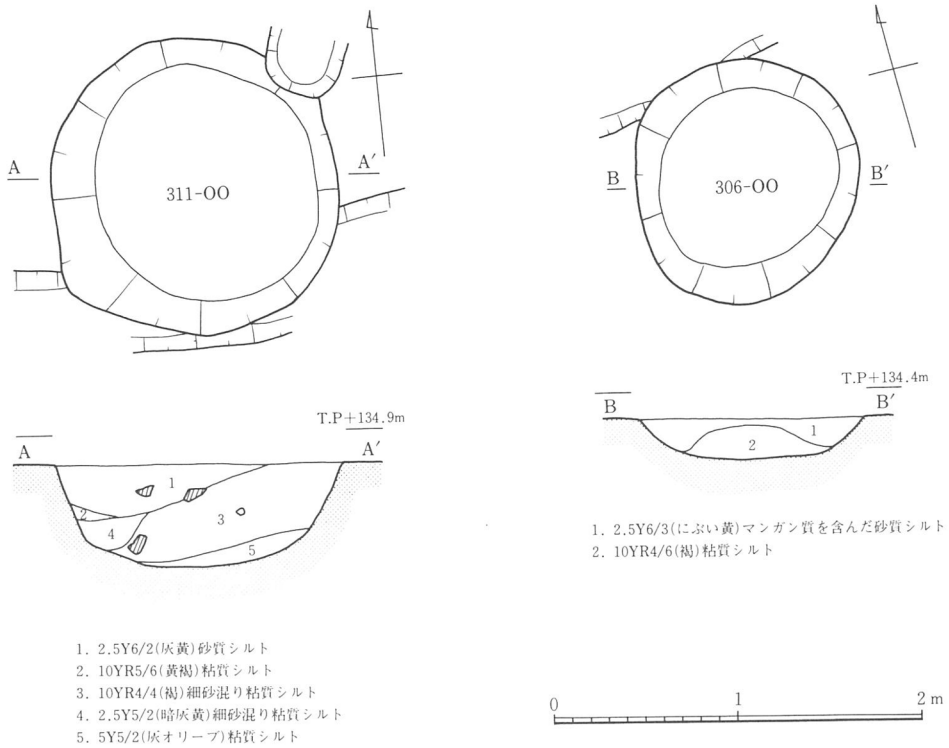
第7節 D地区

本地区では、遺構面を1面しか検出できなかった。この遺構面は、全調査区を通してみただけの場合の第2遺構面に相当するが、一部第1遺構面に相当する遺構も重複して検出されている。遺構面は、北東方向から南西方向に緩やかに傾斜した面である。最も高いところでT.P.+134.6m、最も低いところでT.P.+133.4mを測る。検出した遺構は、B・C地区同様水田耕作に伴った鋤溝と考えられる素掘り溝群が大半で、他に溝・土坑・落込みがある。

306-〇〇（第23・24図） 東側中央部で検出した平面楕円形の土坑がある。長径1.35m、短径1.2m、深さ0.2mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は上下2層に分層でき、遺



第23图 D地区全体图



第24図 306・311-00実測図

物は出土しないが、311-00と形態、埋土の状況が類似することから18世紀前後の所産と考えられる。316-0Sと重複し、それより新しい。

310-00（第23図） 北東部で検出した平面不定形の落込み状土坑である。長径3.5m、短径3.3m、深さ0.15mを測る。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色小礫混り砂質シルトで、時期不明の須恵器片1点が出土した。

311-00（第23・24図） 東側中央部で検出した平面ほぼ円形の土坑である。直径1.5m、深さ0.55mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は5層に分層が可能で、混入と考えられる瓦器碗の破片1点と18世紀代の染付茶碗（波佐見系）が少量出土した。316-0Sと重複し、それより新しい。

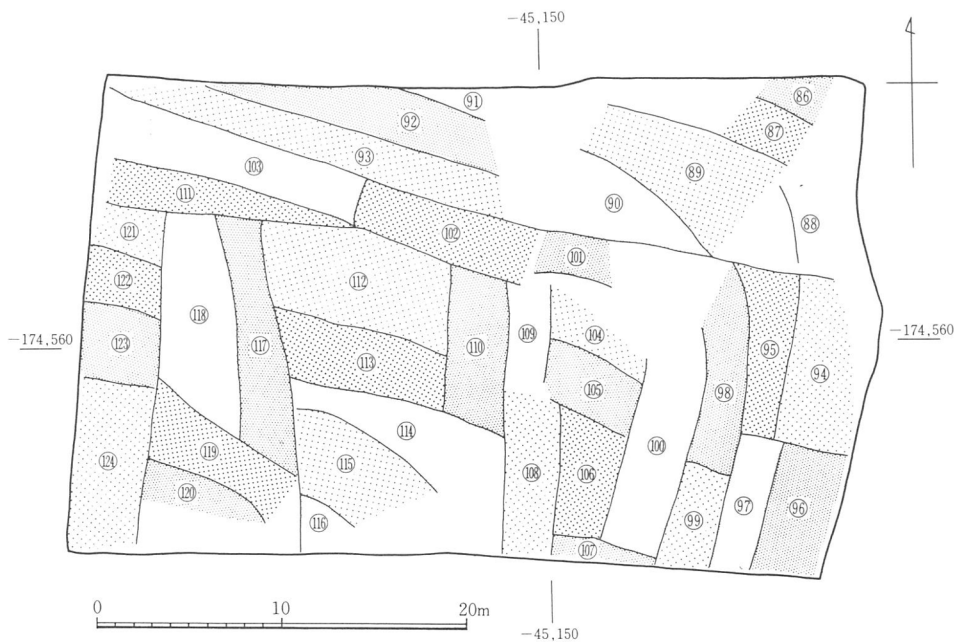
313-0S（第23図） 北東部で検出した北西-南東方向の溝である。北西側は調査区外にのび、南東端部は後世の削平のため袋状に自然に消滅する。総延長6mを検出し、幅0.8m、深さ0.1mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は10Y R5/1褐灰色砂質シルトで、遺物は出土しない。314-0Sと並行に走り、幅0.3mの小溝によってつながっている。316

—OSと重複し、それより新しい。

314—OS（第23図） 北東部で検出した北西—南東方向の溝である。北西側は調査区外にのび、南東側は袋状に終る。総延長2mを検出し、幅0.7m、深さ0.1mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は10Y R5/1褐灰色砂質シルトで、瓦器・土師器小片が各1点出土した。313—OSの北側を並行に走り、小溝によってつながっている。

315—OS（第23図） 北東側で検出した北西—南東方向の蛇行溝である。北西側は調査区外にのび、南東側は袋状に自然に消滅する。総延長11mを検出し、幅0.7m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R5/6黄褐色砂質シルトで、遺物は出土しない。313—OSと重複し、それより古い。

316—OS（第23図） 東側北寄りで検出した北西—南東方向の溝である。北東側は、削平されてはいるが、とぎれながらも残存溝が認められ、南東側は調査区外にのびる。幅0.2～0.4m、深さ5mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで、遺物は出土しない。本溝を境として素掘り溝群の方向が変わる。すなわち、本溝より北側は北西—南東方向、南側は南—北方向を示す。306・311—OO及び317—OXと重複し、前者よりも古く、後者より新しい。



第25図 D地区推定水田区画

317-〇X (第23図) 中央部北東寄りで検出した落込み状遺構である。南側は316-〇Sによって切られているが、推定幅4m前後と考えられる。深さ5cmを測り、底面は浅い鍋底状を呈する。埋土は10Y R3/2黒褐色砂質シルトで、遺物は出土しない。

337-〇〇 (第23図) 西側で検出した平面不定形の落込み状土坑である。長径4.5m、短径0.9m、深さ5cmを測り、断面逆台形を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色微砂で、遺物は出土しない。

338-〇〇 (第23図) 中央部北西寄りで検出した平面不定形の落込み状土坑である。長径3.5m、短径2.3m、深さ3cmを測り、断面逆台形を呈する。埋土は10Y R4/4褐色礫混り細砂で遺物は出土しない。

339-〇S (第23図) 南側西寄りで検出した南-北方向の溝である。南側は調査区外にのび、北側はしだいに幅広になり最後は袋状に終る。総延長10mと検出し、幅1.0~2.0m、深さ0.1mを測り、断面逆台形を呈する。埋土は10Y R5/6黄褐色礫混り細砂で遺物は出土しない。

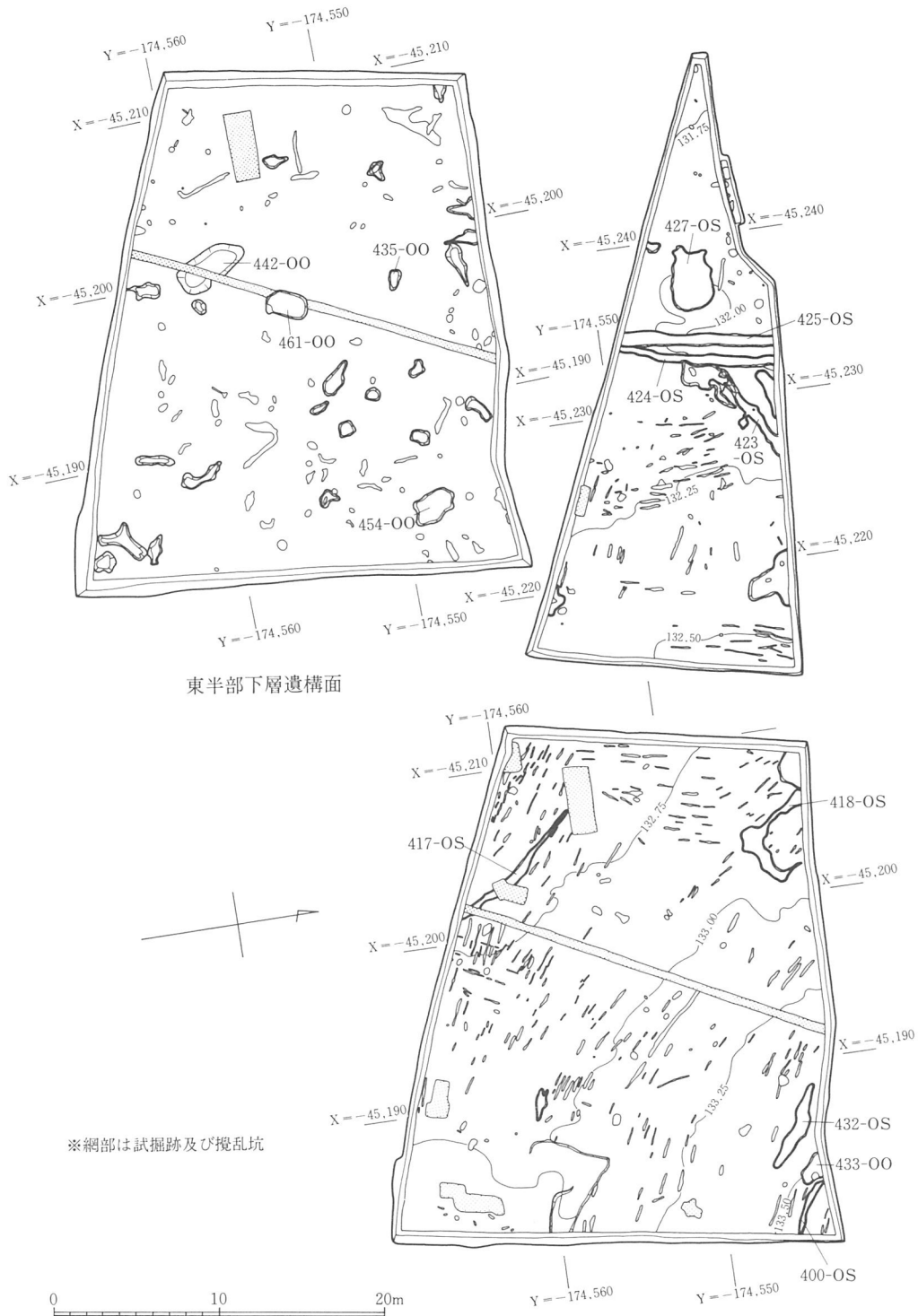
水田 (第23・25図) B・C地区同様、当地区においてもほぼ全域で鋤溝と考えられる素掘り溝群を多数検出した。これらは、本地区が水田面であったことを示唆するものであろう。溝の方向は等高線の方向に一致し、概して北側は北西-南東方向、南側は南-北方向を示すものが多い。これらは埋土の状況により、10Y R4/3にぶい黄褐色砂質シルトと10Y R4/6褐色砂質シルト及び10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトの3群に大別でき、幅20cm前後、深さ2cm前後を測るものが最も多い。埋土による時期差は認められない。なお、これらは地形、溝の状況等から第25図に示したような㊸~㊺までの水田区画が推定できる。その状況はB地区第2遺構面検出の推定水田群と同じであり、出土遺物より13・14世紀の年代観が考えられる。

第8節 E地区

上・下2面の遺構面を検出した。

1. 上層遺構面

ここでいう上層遺構面とは、全調査区を通してみた場合の第2遺構面に相当する。本遺構面は、北東方向から南西方向に緩傾斜・下降する面で、最も高いところでT.P.+133.6



第26図 E地区全体図

m、最も低いところでT.P.+131.7mを測る。検出した遺構は、大半がB・C・D地区同様水田耕作に伴った鋤溝と考えられる素掘り溝群である。他に溝・土坑がある。

400-O S (第26図) 北東端で検出した北西-南東方向の溝である。総延長3.5mを検出し、西端部は調査区外にのびる。幅0.2~0.3m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで、土師器小片が少量出土する。

418-O S (第26図) 北側中央部で検出した方形にめぐる溝である。北西側は調査区外にのび、北東側は後世の削平のためか袋状に自然消滅する。総延長9mを検出し、幅0.4~0.8m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は10Y R4/4褐色砂質シルトで、土師器と瓦器の小片が出土する。後述する推定水田区画⑬-O Zを画する溝であろう。

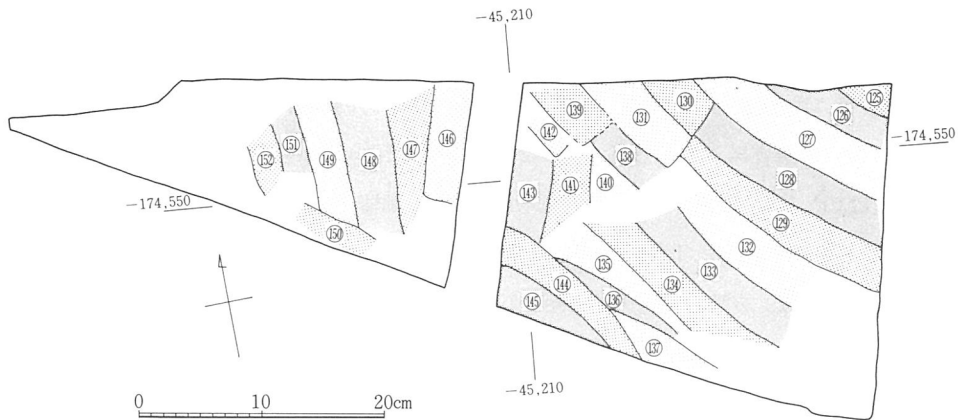
423-O S (第26図) 西側で検出した北東-南西方向の溝である。総延長8mを検出し、北東側は調査区外にのびる。南西側はしだいに幅広になり、端部は袋状に終る。幅0.5~1.5m、深さ0.2mを測り、断面はU字形を呈するが凹凸が著しい。埋土は10Y R3/3暗褐色焼土・炭化物を含んだ砂質シルトで、土師器小片が1点出土した。424-O Sと重複し、それより新しい。

424-O S (第26図) 西側で検出した南-北方向の溝である。総延長9.5mを検出し、両端部は調査区外にのびる。幅0.5~0.7m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は7.5Y R4/4褐色砂質シルトで、土師器と青磁片が少量出土した。本溝より西側では鋤溝と考えられる素掘り溝が全く検出されていないこと及び旧地形がこの部分で階段状に整地されていること(現にこの溝に平行して整地のための杭列が検出されている)などから、従来から水田地域を画する溝の一つと考えられる。423・425-O Sと重複し、それらより古い。

425-O S (第26図) 西側で検出した南-北方向の溝である。総延長9.5mを検出し、両端部は調査区外にのびる。幅0.7m、深さ0.1mを測り、断面U字形を呈する。埋土は2.5Y R4/4褐色砂質シルトと10Y R4/6褐色シルトの上下2層に分層でき、土師器小片が出土する。424-O Sと重複し、それより新しく、その位置関係より424-O S同様、ある一時期的水田区域を画する溝であったと考えられる。

427-O O (第26図) 西側で検出した平面不定形の落込み状土坑である。長径3.5m、短径2.5m、深さ0.1mを測り、断面鍋底状を呈する。埋土は2.5Y 4/3オリーブ褐色礫混り砂質シルトで遺物は出土しない。

432-O S (第26図) 北東側で検出した北西-南東方向の溝である。両端部は削平されているため袋状に自然消滅する。総延長6mを検出し、幅0.8m、深さ0.1mを測り、断



第27図 E地区推定水田区画

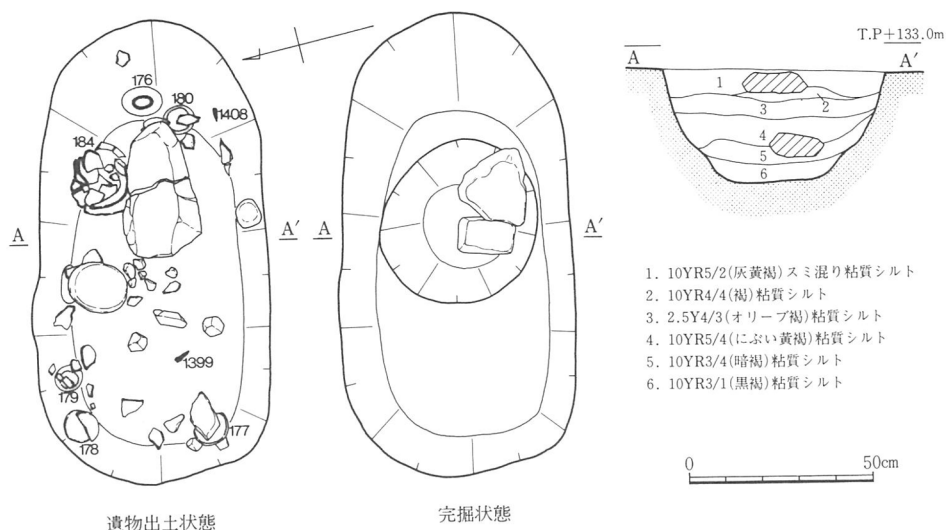
面U字形を呈する。埋土は7.5Y R5/6明褐色砂質シルトで、土師器小片が少量出土した。推定水田区画⑬-〇Zと⑭-〇Zを画する溝と考えられる。

433-〇〇（第26図） 東端で検出した平面不定形の土坑であるが、北西側は調査区外である。北西-南東幅1.2m、深さ0.1mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は炭化物を含んだ10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトで、土師器小片が少量出土した。

水田（第26・27図） 424-〇Sより東側のほぼ全域で鋤溝と考えられる小溝群を多数検出した。これらは、本地域が水田面であったことを示唆する。溝の方向は概して北西-南東方向を示し、中央部の一部で南北方向を示すものが認められる。これらは、埋土によって10Y R4/4褐色砂質シルトと10Y R5/4にぶい黄褐色砂質シルトの2群に大別することができるが、時期差は認められない。幅10cm前後、深さ3cm前後を測るものが最も多く、出土遺物より13・14世紀代の水田面と考えられる。なお、これらは地形、溝の状況などから第27図に示したような⑭～⑮までの水田区画を推定した。その状況はB地区第2遺構面検出の推定水田区画と同じであり、わずかな段差をもって階段状に整地・整形されている（平面的には確認することができなかったが、断面観察によって確認した）。

2. 下層遺構面

ここでいう下層遺構面とは、全調査区を通してみた場合の第2遺構面に相当するが、本地区では東半部のみでしか検出することができなかった。遺構面は、T.P.+133.2m前後に位置し、検出した遺構には土坑がある。しかし、その大半は自然の落込みと考えられるもので、人為的なものは435-〇〇のみと考えられる。



第28図 435-〇〇実測図

435-〇〇（第26・28図） 東半部中央北寄りで検出した平面楕円形の土坑である。長径1.25m、短径0.63m、深さ0.3mを測り、底面船底状を呈する。さらに底面中央部東寄りには直径0.4m、深さ5cmの円形状の窪みが掘られている。埋土は、円形状の窪みを含めて6層に分層でき、平安時代中期の土器及び鉄釘等の鉄製品が3点出土している。遺物の出土状況から廃棄坑的な土坑と考えられるが、土坑の形態、鉄釘が出土していること、上面と下面に扁平な石があることから墓壇、すなわち墓の可能性も十分考えられる。しかし、現段階では、それを積極的に証明する資料を欠くので、ここでは土坑として取扱う。

442-〇〇（第26図） 東半部中央南西寄りで検出した平面不定形の落込み状土坑である。長径4.5m、短径2.0m、深さ0.4mを測り、底面は凹凸が著しい。埋土は10Y R4/4褐色礫混り粘質シルトで、サヌカイト片が1点出土した。

454-〇〇（第26図） 北東端で検出した平面不定形の土坑状遺構である。長径2.5m、短径1.7m、深さ0.1mを測り、底面鍋底状を呈する。埋土は10Y R4/4褐色混り粘質シルトで、遺物は出土しない。

461-〇〇（第26図） 東半部中央で検出した平面楕円形の土坑状遺構である。長径2.5m、短径1.5mを測り、底面は凹凸が著しい。埋土は10Y R5/4にぶい黄褐色粘質シルトで、遺物は出土しない。

第9節 F 地区

1. 第1遺構面

中央部より西側で検出した遺構面である。本遺構面はY=-45,230ライン付近で段差が認められ、東側がT.P.+132.8m前後、西側はT.P.+132.2m前後に位置する。この段差は、後述する525-O B等のために人為的に構築、整地されたもので、18世紀前半の所産と思われる。下段部分は全域耕作面であったと思われるが、確実な水田区画面は1面しか検出できなかった。

検出した遺構は、段より東側（上段）で、カマドや集石遺構を伴った土間と考えられる建物の一画を検出した。段より西側（下段）では、水田面とそれに伴う溝・暗渠を検出した。これらの遺構は、出土遺物より江戸時代中期、すなわち18世紀代のものと考えられる。

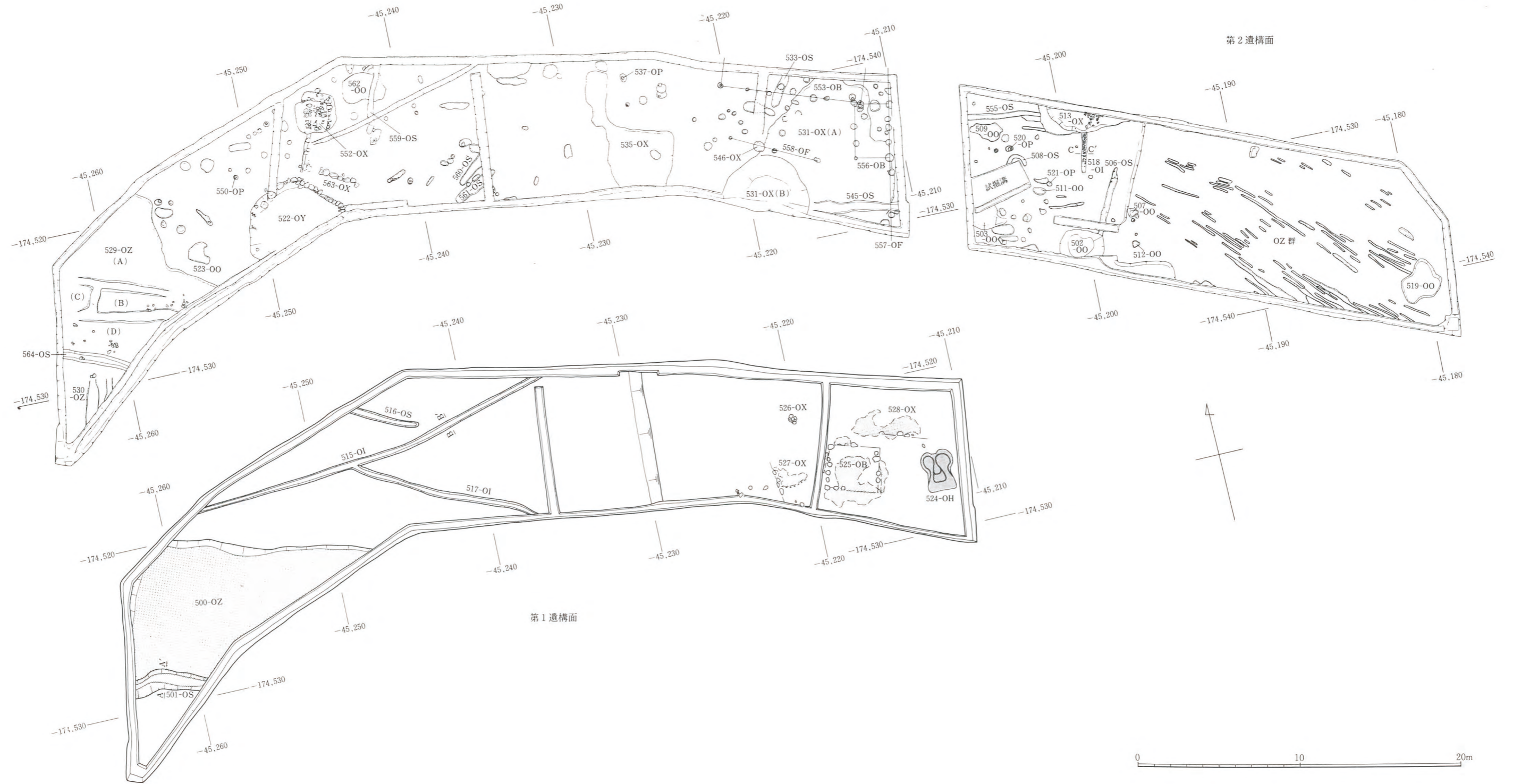
以下、遺構の性格が異なることから段より東側の遺構群と西側の遺構群に分けて記す。

(1) 東側遺構群

525-O B（第29・30・31図） 礎石建物である。後世にかなりの削平・攪乱を受けているが、各辺7個の礎石をならべた建物であったと考えられる。調査の段階では東辺で4個、西辺で6個、南辺で3個、北辺で2個の礎石が遺存していた。礎石は20~30cm前後の扁平な石で、東辺は残存礎石の位置関係から鉤形に屈折してならべられていた可能性が強い。推定規模は東辺で2.5m、西辺で2.8m、南辺で3.15m、北辺で2.9mを測り、上部構造はあきらかではないが、礎石でみるかぎり平面台形に近い形態を示す。南北主軸方向はN-14°-Eである。

本建物は、後述する531-O Xを整地した上に建てられている。特に建物部分は黄色粘質土によって基壇状にわずかに盛土され、中心部分に5~10cm大の礫を多量に敷詰め、その上から、さらにおさえこむことによって非常に堅くひきしめられている。礎石は、この基壇状の盛土縁辺部を削り出し、わずかに掘り込ませてならべたものである。礎石の外側には、基壇状盛土の護石として10cm前後の礫が礎石列に並行してならべられている。護石列の遺存状態は悪いが、推定、東辺で3.1m、西辺で3.55m、南辺で3.75m、北辺で3.55mを測り、礎石列同様平面台形を呈する。しかし、南北主軸方向はN-18°-Eと4°ほど東にずれている。基壇状盛土内より18世紀の波佐見系と見られる染付茶碗が出土する。

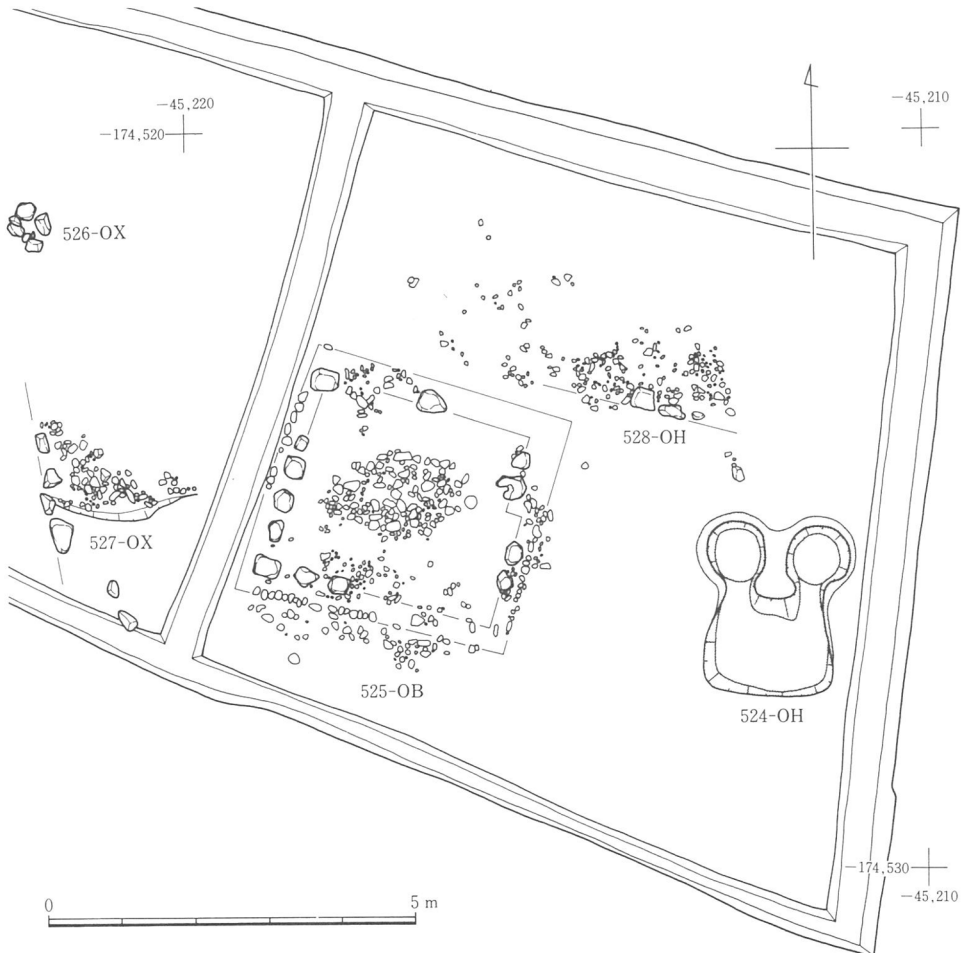
526-O X（第29・30・32図） 東側遺構群中の北西寄りで検出した、円形にならべられた集石遺構である。ベース面より10~20cm上部で検出されたが、その状況より人為的に



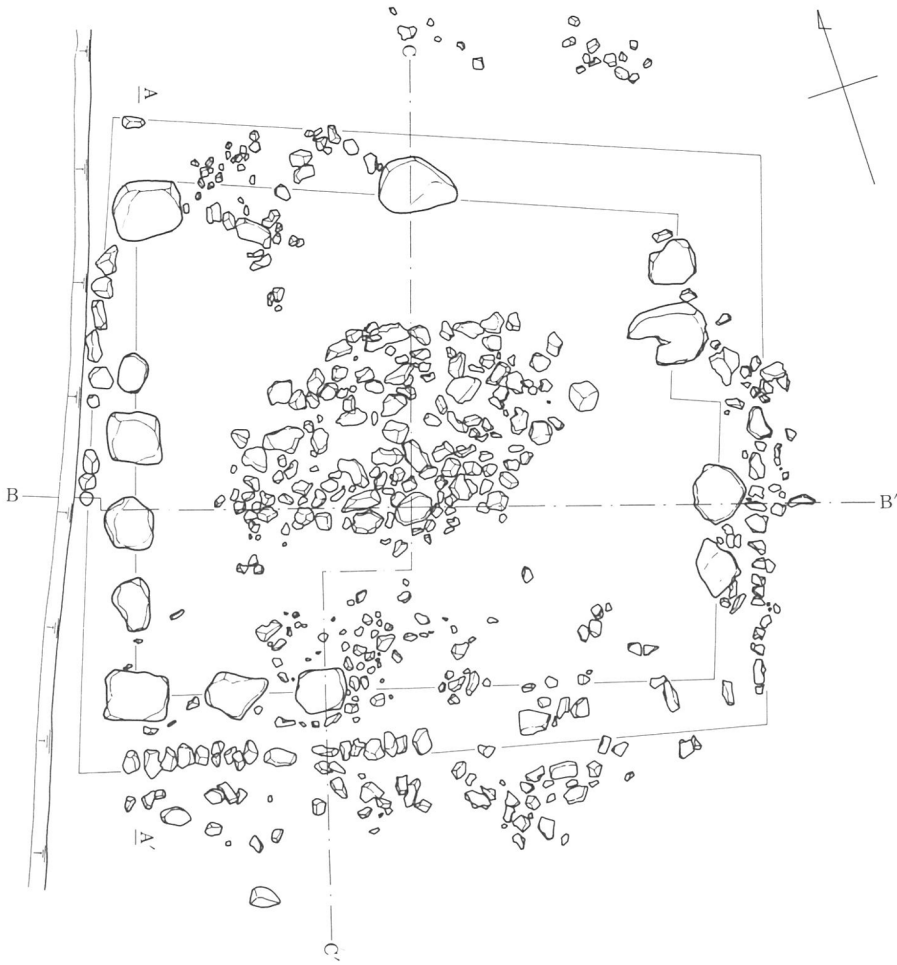
第29図 F地区第1・2遺構面全体図

ならべ置かれたものと考えられる。石の大きさは20×30cmのものと10×20cm前後のものに大別され、別に小石が下部分に見られる。遺構の性格は不明であるが、527-O X石列の北側延長上に位置することから525-O Bを中心とした建物に何らかの形で関係するものと考えられる。

527-O X (第29・30・32図) 東側遺構群西寄りで検出した南北方向の石列である。主軸方向はN-10°-Wを示す。4個がならべられた状態で遺存していたが、同程度の石が周辺に散存することから、さらに多くの石がならべられていたものと思われる。石は扁平で20~30cm前後の大きさを測る。石列の東側は、わずかに窪められて、5~10cm大の礫を多量に敷詰め、強くひきしめることによって整地を行なっている。この整地部分より土



第30図 525-O B周辺平面図



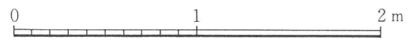
T.P+133.0m



T.P+133.0m



T.P+133.0m



第31图 525-O B 实测图